ナポレオンはこの嘆願書が如何にも軍人に似合はしくない卑怯さに、勃然と憤つた。そして

『速かに兵を派して彼の領土を屠り、永く彼が一家を滅せ。』

と叫んだ。一國の總大將でありながら、國の滅亡を外に見て、己れの領地さへ安全なればいゝといふ卑劣な心を、ナポレオンが蛇蝎のやうに憎んだのは尤ものことである。

（一九二）

プラウンシコヴアイ公は、ナポレオンの詞を聞いて大に恐れ、病床を蹴つて、立上つた。そして一命惜しさにデンマークからイギリスへ逃れようと計つたが、途中で手傷が重つて、遂々死んで了つたといふことである。

これはナポレオンが卑劣を憎んだ一例である。

又も一つの話は、ナポレオンがベルリンに入城したときのことである。プロシアの公爵ハッツフエルトは、早速ベルリン市の鍵をナポレオンの前に提供して、降服の意を表した。そこでナポレオンは取り敢へず、ハッツフエルト公を市長に任じた。

ハッツフエルト公は表面いかにも、まめやかにナポレオンの意に隨つてゐる風をしてゐたけれども、心中は、未だプロシアを憶ふの念が失せなかつた。そこで彼はナポレオンより與へられたる信任を利用して、密かに佛軍の動靜をプロシア國王に書き送つた。ところが不幸にして、この書翰はフランス軍の手に落ち、彼は直ちに軍法會議によりて銃殺の刑に處せられることになつた。

良人が心からフランスに歸順したものと思ひ込んでる公爵夫人は、この事を聞いて非常に驚き、直ちに傳手を求めてナポレオンの面前に到り、良人の罪の寃を訴へた。そして良人の死を宥されんことを請うて止まなかつた。

そこでナポレオンはハッツフエルトの書翰を夫人に見せて、その罪證の確かなことを、のみこませた。

公爵夫人は之を讀み了つて、殆ど驚倒せんばかりに泣き悲しんだが、それから稍々あつて夫人は無言のまゝ、ナポレオンの前に跪いて、ひたすらに良人の二

（一九三）

重情に感じてナポレオンの死罪を赦す

心を恨み良人の罪の許されんことを神に祈つた。

ナポレオンは、この態を眺めてゐたが、夫人の良人を慕ふ情と、その健氣な意氣とに非常な感動を覺えたのである。

ナポレオンは、徐ろに傍らにあるストウヴを指しながら夫人に言つた。

『その書を火中に投げよ。さらば御身が良人の罪證は失はるべし。』

と。

夫人は夢かとばかり喜んで、其の書面を焚いた。そしてハッツフエルト公の罪は赦されたといふことである。

これは、ナポレオンの鐵石心も、人の至情には溶かされることをかたるものである。

或る日のことナポレオンは暇を得たので幕僚を隨へて、フレデリック大王の墓に詣でた。前にも述べた通り彼は少年時代から一通りならず大王を崇拜してゐたが、その大王の國は今自分に征服せられてゐる。あゝ運命の數奇は、まことに不思議なものであると、彼は心中に思つたことであらう。

「人は死すとも、その名は永遠に滅びず」

彼は鄭重に墓前に額づきながら無限の感慨に打たれたのである。そして侍臣を顧みながら、

『人は死すとも、その名は永遠に滅びず』

といひながら暫時そこに佇んだといふことである。

ベルリン條令の發布

二五、ベルリン條令チルジットの條約

ナポレオンは戰鬪一週間でプロシアを全く征服して了つた。歐洲大陸は恰かも無人の境を行くやうなもので、ナポレオンの旗風に手向ふ者は殆んどなくなつたけれども、海上では何うしてもイギリスに敵することが出來なかつたから、ナポレオンは、このことを非常に殘念に思つてゐた。

それで、何とかしてイギリスを苦しめてやる工夫はないものかと、いろ〳〵思案した結果、いよ〳〵同じ年の十一月二十四日、有名なベルリン條令といふもの

を發布した。

この條令の要點は、歐洲の大陸諸國は今後イギリスと通商貿易をしてはならぬといふのであつた。すなはち商業戰でイギリスの國力を衰へさせようとしたのである。

この結果は大陸諸國でいろ〳〵の製造業が勃興するようになつた。フランスが今日多くの事業を有して盛んに國產品を製造し、夥しい富力を得てゐるのも全くこのナポレオンの政策の御蔭である。

かうしてナポレオンは暫らくの間ベルリンに駐まつて全軍を犒らつたのち、プロシア國王を追尾し、またロシア軍を討たうと思つて、いよ〳〵軍を率ゐて北方に進めることになつた。

彼は先づポーランドへ進軍せんと道をその方向へとつた。

その時、時候はすでに十一月の冬空で折柄の寒氣に加へて懷かしいパリの都を距ること幾百里、全軍は何となく故國戀しくなつてきて、士氣が漸く衰へようとしてゐた。

ナポレオン全軍をして奮ひ立てしむ

逸早くも之を見てとつたナポレオンは、部下の士氣を鼓舞するに力めたことは非常なものであつた。

そこで全軍は俄に生れかはつたように勇み立つて、歩武堂々北の方へと進軍していつた。

さてナポレオンがこれから兵を進めようといふポーランドの國は、一體どんな國であるか少し査べて見ようと思ふ。

ポーランドは往昔は相應に有勢な一王國であつたが、當時より四十年ほど前から三度もロシアやプロシヤ、オーストリアなどの強國のために强奪せられて分割せられた國である。

だから其國民は非常に不幸に陷つたけれども有名なコスイスコや、その他の愛國の士が興つて恢復を圖つたが、一叛亂ごとに敵國の壓迫が惡辣を極め、遂にポーランドの國は全く亡びて了つた。

ナポレオンベルリンを出發す

亡國ポーランド人の愛國心

けれども、ポーランド人の愛國心は熱烈なもので三強國に分割せられた百五十年を經た現在に於ても、祖國の恢復を念ふの情は一日も忘れたことがないのである。亡國の民として勵精勤勉、祖國を愛するの熱情が熾なことポーランド人のやうなのはあるまい。

今度の歐洲大戰爭に於て、ロシア皇帝が逸早くポーランド人に自由を許したのも、つまりは旨くポーランド人の愛國心を利用した譯で、かうして恩を着せておけば、ポーランド人がいざといふ場合に我がロシアのために盡力するに違ひないと思つたからである。

ナポレオンは、すでに百年以前このロシアの政策と同じ謀を用ひてポーランドを味方に加へようと思つたのである。

當時ポーランドは、すでに三國に分割せられて非常な壓制を受けてゐた。殊にロシアの壓迫が甚しかつたので、亡國人の之を憎むことは非常なものであつた、そこで慷慨悲憤の志士は、多くフランスなどに亡命して、故國の難を救ひたいと

苦心してゐた。彼等はナポレオンが、こんどの遠征についても、確かに祖國恢復に力を藉して呉れることを信じてゐた。そこで、早速故國に檄を飛ばして國人を激勵した。

『親愛なる我が國人よ。奮ひ起て。偉大なる英雄は、今汝等の前に來りて祖國を救はんとす。ナポレオンは汝等の蹶起を期待す。我等今や奇蹟の如く困難を征服する君主の下に在り。憤起は今ぞ』

と。

十一月二十一日いよ〳〵佛軍が勇ましく蹄の音、喇叭の響を立てゝポーランドの都ワルソーに堂々と乘りこんで來たときの市民は、醉へるやうな歡喜と、狂へるやうな熱情を以て、佛軍を歡迎したのである。

ナポレオンは直ちにロシア軍を追擊しようと思つたけれども、將士は永い間の辛勞に、幾分意氣が弱くなつてをり、殊に慣れぬ北國の嚴寒中に戰ふのは、味方の不利だと思つたから、全軍に令を傳へて此のワルソーに暫らく休養することに

ロシア軍の挑戦

した。

フランス軍滯陣中のワルソーは忽ち歡樂の巷と化した。

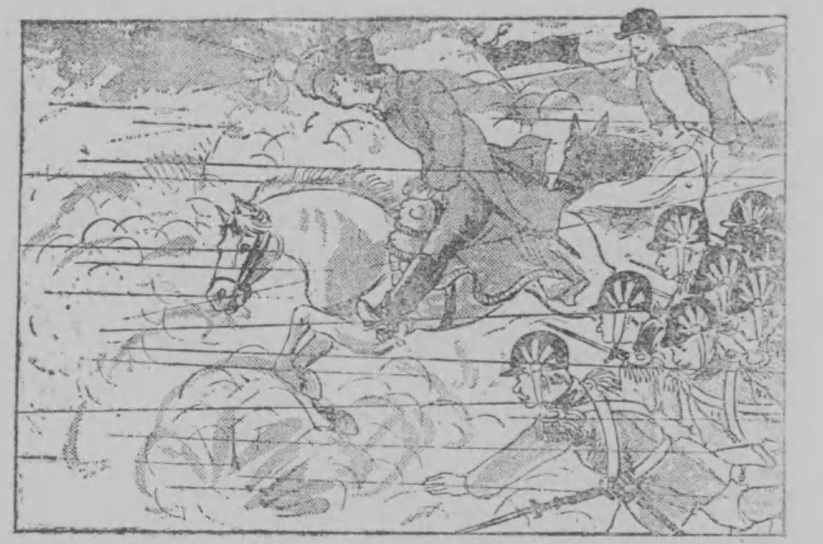
明けて一千八百七年の二月ワルソーの歡樂は俄かに其の終りを告げた。

ロシア軍の方では徒らに大軍を擁して敵の來襲を待つよりは、フランス軍をこの酷寒の降り積つた雪の裡に引つ張り出して、一擧に全滅してやらうといふ計畫であつた。

露將ベンニグセンは愈よフランス軍と決戰しようと思ひ、二月七日豫て計畫してをつた通り、全軍をアイラウといふところに進めた。

ナポレオンもロシア軍の此の計畫を偵知してゐたから、準備をさ〳〵怠りはなかつた。

三月七日の夜、ナポレオンは自らアイラウに來り、白馬に跨つて隈なく附近を視察した。折しも靑白い冬の月は白皚々と降り積つた雪に照り映えてゐる。遠く眺めると露軍の夜營には數限りもない警火が燃えてゐる。ナポレオンは一種の感



慨に打たれ乍ら胸の中に戰鬪の策略をめぐらしてゐた。

明くれば二月八日である。雪は折から霧れてゐたけれども、雲低く垂れ天地暗憺として物凄い朔風が吹き荒れてゐた。

佛軍は早天から二た手に別れて攻擊を開始したがロシア軍は勇敢に抵抗して一歩も退かず、それに加へてコザック兵の騎隊は諸所に出沒して縱橫に攻めたてゝ、頻りにフランス軍を惱ました。

かうして、兩軍が必死になつて戰つ

雨軍勝敗なくして退却す

てゐる中に午頃から猛烈な大風雪がやつて來た。吹きまくる雪は兩軍の面を強く打つた。一寸先きも見えぬ恐ろしい光景のなかで、追ひつ追はれつ兩軍は戰つた。

仕舞には大砲や鐵砲が寒さのために利かなくなつた。兩軍は、こゝに砲戰を罷め劍槍を執つて接戰した。

早朝から十數時間に渡る激戰に兩軍は綿の如く疲勞して了つた。そのうちに冬の日脚は短く、降る雪は益々強く天地を包んで了つた。夕暮になつて兩軍は最後の決戰をなしたが敵軍は雪中戰に慣れてゐるから、フランス軍の方が稍ともすれば擊退されがちであつた。ナポレオンさへ敵の捕虜となるところを辛つと免れた位で、佛軍のオーゼロウ將軍の軍隊は全滅して了つた。けれども、ムラー將軍の騎兵突擊によつて露軍の前進を喰ひ止めることが出來た。

やがて靜々と降る雪のまゝいつか夜になつて了つた。

こゝに兩軍は、つひに勝敗を決しないまゝで退却した。

この慘らしい雪中戰に參加した兵數は、兩軍併せて十六萬であつたが、死傷實に五萬に及んで、二萬五千の死屍は、徒らに雪中に埋もれた。

翌日ナポレオンは、自ら白馬に跨つて戰場を馳せ廻り、兩軍の傷つける者に厚い手當をしてやつた。

アイラウの雪中戰は、かうして勝敗何れとも決せぬまゝに兩軍退いたが、ナポレオンは再びワルソーには還らなかつた。

彼は本營をオステロドといふところに設けて、再びロシア軍と戰ふ準備を急いだ。雪の切りなしに降るなかを、泥濘の膝を沒するなかを恰かも一兵卒のように働いた。又自ら馬を驅つて哨兵線を巡視し、兵士等を激勵し、傷病に惱んでゐる者を慰めた。

皇帝が、こんな風であつたから、懸軍萬里、故郷を去つてからすでに幾月かの間寒風膚を劈く、この異域にあつて、坐ろに望郷の念に驅られてゐたフランスの將士も、一と度ナポレオンの何物にも屈せぬ勇ましい姿を見る時は、故郷戀しの念もいつしか忘れて思はず「皇帝萬歳」を叫ばずにはゐられなかつた。そして心

の底から此の皇帝の御爲めとあらば、いつでも君の馬前で死ぬことを厭はぬと思ふのであつた。

しかるにナポレオンは、かうした戰場のこと以外に、遙かに本國フランスの政務を統べ、事細大となく彼が自ら處決を下してゐた。

そうかうしてゐるうちに、時候が移つていつて、ロシアの天地もいつしか夏になつた。

アイラウの激戰があつてから兩軍の間に多少の小競合はあつたが、別に言ふほどのことはなかつた。ところが六月に入つてから兩軍の戰機は熟し、いよ〳〵フリードランドの決戰を以て、この戰爭は漸く終はりを告ぐることになつたのである。

フリードランドの戰が開始せられる前に、ナポレオンは兵數を增して、東北さして退却するベンニグセンの大軍を次第に追擊していつたのである。五月に佛がダンチッヒといふところの要塞を陷いれてから、ベンニグセンは佛軍の勢に壁

易して、早くもアルレ河の唯一つしかない細長い橋を渡つて退却した。

このアルレ河のほとりにフリードランド町があつた。

ナポレオンの計略では何うにかして敵軍を河の此方側に誘き出し、そして敵を破つてやらうといふのであつた。そこで先づ味方の前線には態と小勢の兵を出しておいて、大部隊は翳然と茂つた森の內に潛してゐた。

さすがに謀に富んだベンニグセンもナポレオンの術中に陷るとは氣がつかず、前線の敵は僅かであるし、之を擊退するに譯はない、といふので直ぐ引き返してきて、橋を渡りフリーラドンドとアルレ河とを背にして佛軍を攻めてきた。

ナポレオンは我が計略圖に當れりと潛かに喜んで、敵を迎へ伐つたが、始めのほどは態と支へ兼ねた風をして退いたり、進んだり好い加減にあしらつてゐた。

この日は恰度六月十四日で、思ひ出せば七年前アルプスの峻嶺を越えてマレンゴーの平野にオーストリア軍と激戰した日である。そして大勝を獲た日である。

ナポレオンは馬を驅つて戰陣を驅け廻りながら、「マレンゴー（記念日」を高く

叫んで味方の士氣を鼓舞した。

ナポレオンは、そのうちに馬を陣頭に進め、時機を覗つてゐたが、突然佩劍を振り翳して遙かに森の方を嗟くと見る間に、時ならぬ森の中の大軍が一時に現はれ出た。敵軍が驚き目を見張つてゐる中に、疾風のやうに佛軍はロシア軍に殺到してきた。この俄かの突擊にロシア軍が度を失つて周章てゝゐる所へ、今まで弱味を見せてゐたフランス軍の前線も、急に態度が變つて激烈な攻勢に轉じた。

しばらくの間兩軍は猛烈に戰つた。夕方になるまでロシア軍も不利な陣地を固く守つて動かなかつたが、フランス軍の總攻擊にたまりかね、次第にロシア軍は後方に退却し始めた。

ナポレオンが計略の妙機はこゝであつた。

佛軍は敵の跡を追うて直ちに追擊に移つた。露軍は狼狽措くところを知らず、前に言つた細長い唯一つの橋を渡つて逃げ始めたが、多數の將士が我先にと渡り

※ナポレオン

始めたことであるから、その重味に堪まりかね橋は壞れて了つた。

殘餘のロシア軍は渡る路を斷たれて如何ともすることが出來なかつた。後ろからは激しいフランス軍の追擊があるし、進退こゝに谷まつて、みな武器を棄てゝ河中に飛び込んだ。溺死した者も少なくなかつたが、この一戰でペンニグセンは全く敗走して了つた。

ロシアは此のフリードランドの戰で全然意氣沮喪し、皇帝は止むなく休戰を請うた。

そこでナポレオンはロシア皇帝の懇

願を容れて六月二十三日に休戰條約を結んだ。

兩帝筏の上で會見す

その翌々日二十五日にナポレオンはチルジット附近のニーメン河の筏の上でロシア皇帝アレキサンダー一世と會見した。そして互に和親のことを約したのである。

この兩帝の會見があつてからプロシヤ國王とその皇后も招かれて、こゝに來り會した。そしてナポレオンとの間に條約が結ばれたのである。

チルジットの條約

この條約に依つてプロシヤは其の領土の半を失つた上に一億一千二百フランの償金を取られた。常備軍の兵數は四萬二千に限られ又ナポレオンのベルリン條令を遵奉せしめられた。

又ロシアは、すべてナポレオンの處置を悉く承認しなければならなかつた。そして矢張りベルリン條令を守り、且つイギリスとフランスとの間の仲裁をも引受けたのである。

同じ年の千八百七年の七月ナポレオンは芽出度パリに凱旋した。市民は例によつて、あらゆる欣びを以て此の光榮ある遠征軍を迎へ犒らつたのである。

ナポレオンが劍の力と法の力

二六、イスパニア、ポルトガルの併合

チルジットの條約があつてから歐洲の天地にも一先づ平和の風が吹き渡るようになつた。

ナポレオンは此の間に戰亂で多少亂れたところの內治を改良しようと企てた。彼は今日まで到るところ劍を以て天下を切り隨へた。そして其の劍の蔭には常に「ナポレオン法典」が附き添うてゐたのである。だから、彼があらゆる方面にフランス國內の內治を改良した後で、その戰勝によつて獲た領地を治むるに當つても中世紀以來の壓制を打破し、その住民に與ふるに權利と自由の賜を以てしたのである。ナポレオンを雷に劍を以て天下を隨へる人と思ふ者もあるかも知らぬが、彼は天下を治むるに劍の力よりは、法の力が更に偉大であることを認めてゐたのである。

プロシアの如きはナポレオンのために散々敗けて了つたが「ナポレオン法典」の德が深く國民の胸裡に刻みつけられて次第に革新の域に近づく原因を作つたのである。すなはちプロシアはエナの大敗以來スタインといふ人のような偉い政治家が出てフランスの内治に察し、ナポレオンの施設に鑑みて、思ひ切りよくフレデリック大王以來の舊法を棄て新らしい政治を布くに至つた。

ナポレオンは、かうして政治方面の改革に苦心してゐたが、その間にも一方飽くまで「ベルリン條令」を完全に實行しようと努めてゐた。

ところが、その時はナポレオンの勢が強いので大概の國は之を實行してゐたが、ポルトガルとイスパニアとの兩國はイギリスの後楯を頼みにして此の條令を奉じなかつた。

イスパニア（スペインのこと）

ポルトガルナポレオンの命を奉ぜず

ナポレオンは時機があつたらこの兩國を懲らしてやらうと思つてゐた。

その時イスパニアの王室は非常に亂れをつて國勢は丸で振はなかつた。國王のチャールス四世は、もう老齢で、しかも暗愚であつたから國の政は一切他人任せであつた。そして王妃と、その寵臣のゴドイといふ者との二人が勝手に政治を私してゐた。こんな風であつたから兩人の專横を憎む者が多くなり、從つて段々民心を失ふようになつた。殊に太子のフェルヂナンドはゴドイを惡むこと非常であつた。

イスパニアの紊亂

そこで權臣のゴドイは自分の權勢を盛んにして反對の太子派を壓服するにはフランスに頼るのが一番だと考へ、王や王妃と相談して使をナポレオンに送つた。

ナポレオンは腹の中で時こそ來れと喜んで早速承諾の旨を答へた。

そこでナポレオンは一千八百七年十一月ジュノー將軍に三萬の兵を授けて出發せしめイスパニアの軍と聯合して、難なくポルトガルの首府リスボンを占領せしめた。その國王は一族ならびに貴族を引連れて遠く南アメリカのブラジルへ落ち延びた。

ポルトガル征服

「ベルリン條令」を妨げるポルトガルは、からして譯もなく解決がついた。

そこでナポレオンはポルトガルの叛亂とイギリス軍の侵略とに備へるといふ名

目の下に、ジユノー將軍の他に更らに五萬餘りの軍隊を送つた。

ところがイスパニアの政府では佛軍の侵入を丸で怖れてゐなかつた。否それどころか、寧ろ歡迎するやうな態度であつた。

これは何故であつたかといふに、イスパニアの寵臣ゴドイ派と太子フエルヂナンド黨との反目が一日增しに激しくなつて、果ては名々自分の利慾のことで目が眩み、己れの國が自滅になるのも氣付かず反つてフランスの力を假りようと計つてゐたからであつた。

その中にゴドイの專横が餘りひどいのを見たイスパア人は、つひに彼を誅伐するために亂を起した。一群の暴徒は不意に首府マドリッドの彼が邸宅を襲つて、とう〳〵捕縛し牢舍に投じて了つた。

國王は之を聞いて非常に恐れ、直ちに位を太子フエルヂナンドに讓つた。

國民はみな歡喜して新らしい國王フエルドヂナンドを迎へた。

この時は既にフランス軍の大部隊はムラー元帥を大將としてマドリッド近くに

マドリッド占領

イスパニアの王權ナポレオンに歸す

迫つてゐた。けれども國人はフランス軍がフエルヂナンドを援助するのであると思ひ込んでゐたから、敢て之に抵抗しようともしなかつた。

その中にフランス軍はマドリッドを包圍して何時の間にか之を占領して了つた。

ナポレオンはムラー將軍が餘り急速にマドリッドを占領したことを聞いて、深く心を惱ました。夫れはイスパニアの王權が殆ど地に墜ちて了つたとはいへ、萬一あまり早くつためにに國民の愛國心と名譽心とを傷けるやうなことがあつては、今後どんな動亂が起るかも知れぬといふ掛念のためであつた。そこでナポレオンは急使を遣はして、ムラー將軍に成るべくイスパニア國民の感情を害さぬようにせよと戒めたのである。

此のイスパニア王家の不和が原因をなし　遂にチャルス四世もフエルヂナンドも、永くイスパニアの王權を失ふことを宣言せられた。その代り多額の年金を貰つて安全にイタリーに退隱することになつた。

ナポレオンは、かうして血を流さず　イスパニアを領有することになつたが、

彼は直ちに今までの弊政を改め、民の負擔を輕くし、文明的の政治を布いて、大いに民のために盡したのであるから、本來ならナポレオンの德を謳歌すべき筈であるのに、彼等は永年の陋習に慣れてゐて、あやまつた愛國心をふりかざし、多年奉じて來た王室が廢せられたことを恨みに思つたのである。こゝに國民の憤慨は頂上に達し、貴族や僧侶などが先きに立つてイギリスまでが盛んに之を煽動したから、排佛感情は彌が上にも猛り立つた。

イスパニア國民の憤慨

ナポレオンはこれを聞いて、部下が自分の命令通り穩かにイスパニア國民に對していたならば、こんな結果に至らなかつたと思つたが、今はそんなことを言つても無駄であることを知つたから、取敢へずイスパニア國内の秩序を回復させることにし、兄のジョセフをナポリから招いてイスパニア國王にした。その後はムラー將軍がナポリ王を繼いだ。

しかしこんな事でイスパニア國民の騷ぎは靜まらなかつた。これはイギリスの後援も與かつて力あつたことである。

サラゴッサの包圍

騷擾は益々大きくなつてイスパニアの軍隊ばかりでなく、國民はみな老弱男女の區別なく一齊に奮起した。到るところの町や村は、みな其城壁を死守してフランス軍に抵抗した。

中にもサラゴッサ市がフランス軍に包圍されたときイスパニアの國民が死を以て之を防守した物語は、勇ましい一美談として後世に語り傳へられてゐる。

サラゴッサ市はエブロ河畔にある舊い都であるが、その市民は僅かばかりの軍隊を力にパラフォーといふ一青年貴族が首領となつて、フランス軍に對抗してゐた。その中に衆寡敵せず、遂にサラゴッサは佛軍の包圍するところとなつて了つた。これは一千八百八年六月のことであつた。

僅かに十六門の大砲と少數の鐵砲としか有たなかつたけれどもサラゴッサの老弱男女は力を協せて防ぎ戰つた。男子は市門に出てフランス軍を禦ぎ、僧侶までも陣頭に立つて奮戰した。婦人は城中にあつて甲斐々々しく負傷兵を看護したり兵糧を運んだり、健氣にも彈丸雨飛の間を奔走し、妻は夫を助け母は子を勵まし

てゐた。

ある日のこと、マリア オーガスチナといふ乙女は例ものやうに兵糧を運んで市門まで來ると、そこの守兵は敵軍の砲火のために悉く斃されてゐた。彼女は慘ましい眼を以て夫等の戰死者を弔つたが、何氣なく見ると、その死者の中には自分の許嫁である夫――それは砲手であつた――が肉は裂け血は流れて、見るも勇ましい、しかも慘たらしい屍を横たへてゐた。

彼女の後から此の市門を守るためにやつて來た人々も、このあまりな慘狀に暫らくは敵を防ぐことも忘れてゐたが、オーガスチナは女ながらも許嫁の讐仇を打たずにはゐられないと決心した。そこで累々と横たはつてゐる多くの死屍を踏み越へて、死んだ許嫁の夫が、なほ握つて放さなかつた火繩を彼女は手にとつた。

彼女は雄々しくも自ら砲身に跳り上がつて敵軍の方を睨み、力の續く限り二十六斤砲を發射し續けた。そして一つは祖國のため、二つには亡き夫のため生きて此處を去らじと盟つた。彼女は勇ましい「サラゴッサの少女」として、今もその勇敢を語り傳へられてゐる。

一少女の勇ましい有樣に勵まされて、イスパニアの士卒は急に英氣を恢復して敵の砲壘に突進し見事佛軍を擊ち退けたのである。

こうして四十六日の後サラゴッサは衆寡敵せず全く敵の重圍に陷つて了つた。糧道を絶たれて今は城内飢餓に迫つた。そして敵彈を避ける場所さへも失くなつた。佛軍は市内に亂入してバラフォーに降服を迫つたが、彼は頑强に之を拒んだ。それから十一晝夜の間といふものは慘烈な市街戰が初まつて、その物凄い有樣はなかつた。イスパニア側も今は辛うじて市の一角を守るやうになつたが、夫れでも降參せず、フランス軍に敵對してゐた。佛軍も案外な防戰に一旦は恐れて退却したが、再び精鋭の兵を以て攻めて來たので、翌年一月遂に降つて了つた。

この勇ましいサラゴッサの籠城戰は大いにイスパニア國民の愛國心を刺激してフランスを憎み、ナポレオンを罵る叫聲が、いやが上にも高まつて、フランス軍は彼方此方で、叛徒のために圍まれ、決死の市民のために擊退される有樣となつた

この兵亂に乘じて、イギリス軍はポルトガルに上陸し、ウエルリントン將軍は一萬六千の兵を以てジユノーの兵を破り、之を擊退した。

この意外の失敗を聞いたナポレオンの心はどうであつたらう。彼は味方の將軍の腑甲斐なさを歎き憤り、我が軍服を指して

『こゝに滲が付いたぞ。』

と呶鳴つた。彼はイスパニアに於ける佛軍がオメ〳〵烏合の叛徒に敗れ、イギリス軍に擊退されたことを聞いて、聲を顫はし涙を流して、フランスの汚辱を慨嘆した。

ナポレオンは直ぐにもイスパニアに攻め入つたが、これを決行するに先だつてその留守が心配であつたから、露帝はじめその他屬領の君主と一層同盟を固くしてをく必要上、先づサクソニアのエルフルトといふところで君主會議を開いたのである。

これが終ると殆んど一日も猶豫せず、千八百八年十一月、十五萬の兵を率ゐて、例の高山ピンネー山脈の深く降り積つた雪を越えて、イスパニアに攻め入つた。

ナポレオンのピンネー越え

いかに決死の勇を以て頑强に抵抗したとはいへ、イスパニア軍は素よりナポレオンの精兵に敵する筈がなかつた。瞬く間にイスパニア勢は打ち負かされ、散々に潰えて了つた。ナポレオンは豫定通りにマドリッドを占領した。

彼は更らに進んでポルトガルに入り、首府リスボンを攻め、イギリス軍を擊退しようとした。この時ムーア將軍の率ゆる英軍はリスボンからマドリッドに向つて進軍しつゝあつたが、途中で、ナポレオンの攻め上るのを聞いて、急に畏れ驚き、海岸から船に乘じて本國に遁れ去らうと決心した。

ナポレオンは之を聞いて直ちに猛烈な追擊を開始した。

その時は恰かも冬の最中であつたから、朔風は身を切る如く、降る雪は野山を埋めて追ふ者も追はるゝ者も、其の困難は名狀出來ない程であつた。

彼は部下を勵ましながら、辛つとアストルガといふところまで進んでいつたと

ころが、こゝへ巴里から注進がやつて來て、容易ならぬ報告を齎した。

夫れはオーストリアが再び兵を擧げようとしてゐるといふことであつた。

彼は之を聞くと

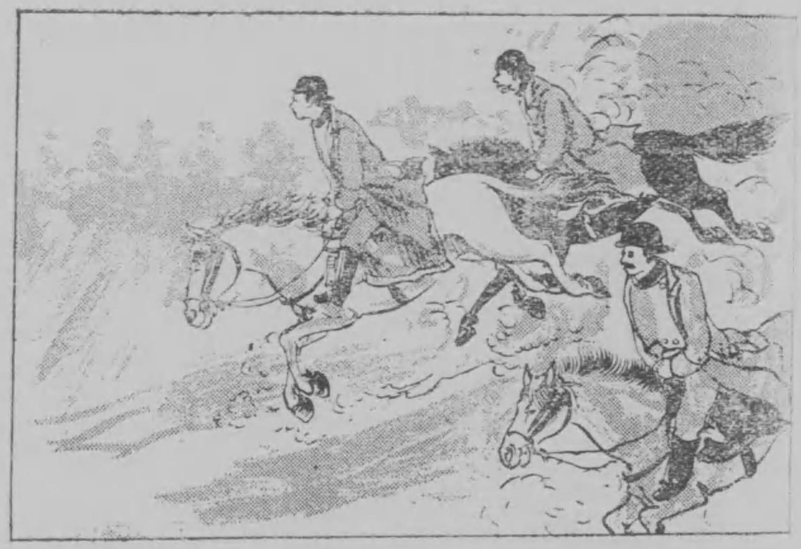
『オーストリアは朕の不在に乘じて事を擧げようといふのか。そんな卑怯な男らしくないやり方で何が出來るものか。見よ〳〵朕は日ならずオーストリアを蹂躙して、此度こそは十分懲らしてやるぞ。』

といつた。

ナポレオンは直ちにイギリス軍追擊のことをスール元帥に委せて、僅かの部下を隨へて引返した。

スール元帥はいよ〳〵激しくムーアの英軍を追うたが、どうしても英軍の退路を遮ることが出來なかつたが、つひに翌年一月スールの軍はコルナの海岸で英軍に追ひ迫つて。こゝに激しい劇戰が開かれた。

フランス軍も少からぬ損害を蒙つて屢々擊退せられたが、英軍は主將ムーアが



戰死したけれども、殘兵はみな船に乘じて本國へ遁れ去つた。

一方ナポレオンはウアリヤドリードといふイスパニアの舊都まで引返してこゝで一切の國事をジョセフに委せ。いろ〳〵の策を授けた。

そこで、早速、彼は僅か數騎の從者を連れたのみで、親ら馬に跨り。巴里へ向つて驅けだした。驛路から驛路へと息もつかず拍車を蹴立て、馬背に鞭ちながら疾驅した。ある村から、ある村へ七十五哩の長途を僅か三時間で到着したといふことがナポレオン一生中

ナポレオン一生中の早駆け

の早駆といつて今でも、その邊の語り草として傳へられてゐる。

彼が事急なる場合には、その身の皇帝たるをも忘れ、衆に先立つて、あらゆる苦痛、冒險を厭はなかつたことは、この一事でも知ることが出來る。

二七、三度オーストリアを粉碎す

オーストリア三度兵を擧ぐ

オーストリアは此時前後二度までナポレオンのために大敗を蒙つたが、その敗辱を永く忘るゝことが出來なかつた。一度は雪辱戰を試みてフランスを懲しらうと時機を視つてゐた。

ところが、オーストリアにとつては、機こそ好けれ、ナポレオンは遙かイスパニアの野に在つて不在である。今にして起たなければ、何時大敗の怨みを報いる時が來るか分らない。今こそ起つてフランスの虚を突けと無謀にも卑怯にも、遂に三度フランスに反抗の旗を擧げることになつたのである。イギリスは之を聞いて、密かに四百萬磅の軍費を提供した。

「兵は神速を尊ぶ」

ナポレオンがイスパニアで此の急報に接し、流星のやうな速さで巴里に歸つたことは前に述べた。

神速果斷なナポレオンは、誰も豫想出來ないほどに急いでイスパニアから歸り直ちにライン同盟諸邦に命を下して軍備を嚴にし、忽ちの間に大軍を催して、早くもオーストリアに攻め入つた。

オーストリア軍の總數は五十萬と註せられていたが、ナポレオンの方はイスパニアに大軍を駐屯せしめてをいたから、兵數に於てはオーストリア軍より劣つていた。けれども、ナポレオンの主義は何時でも

『兵は神速を尊ぶ。』

といふことであつた。だからオーストリアの方では、ナポレオンが、よもや未だ巴里へ歸つてゐる筈はあるまいと思つてる中に、自ら僅かの兵を率ゐて攻め入つた。

ナポレオンは兵數では敵に叶はなかつたけれども、彼の絶妙な奇計は到るとこ

ウイーン陥落

ろに功を奏して、勝たざるはなかつた。ナポレオンのために意外に先を越されたオーストリア軍は、又、行くところとして破れざるはなかつた。

そして、あれほど猛烈にフランスに對して雪辱戰を試みやうと振ひ立つたオーストリアの軍勢は、忽ちの中に士氣が沮喪し初めた。

佛軍は各所に轉戰し、進軍毎に連戰して大いに墺軍を打碎き遂ひに一千八百九年五月に及んで、ウイーンを占領した。

オーストリアの帝室はハンガリアに遁れた。

墺軍は首府ウイーンを占領せられたけれども、今度の決戰でナポレオンに降服したなら、もう復た起つ機がないといふことを知つてゐたから、あらゆる犧牲を拂つても戰を繼續するつもりであつた。

ナポレオンはウイーンから更らに進んで、ドナウ河に三つの橋を架け、こゝから軍を進めようとした。オーストリア軍は此處ぞとばかりに、軍勢を集中し、フランス軍に約三倍する大軍を以て砲擊した。フランス軍は衆寡敵せず、アルペルンに於てチャーレス大公のために屢々陣形を亂されようとしたが、後方から味方の援兵が來たので、再び軍を進めることが出來た。けれども、此の戰でオーストリア軍が大砲を放つこと四萬發、しかも佛軍は糧食さへも盡きて既に喰ふものさへなかつたが、ナポレオンは此の窮境に在つて軍を勵ましながら、徐ろに謀を考へてゐたのである。

アスペルンの戰、佛軍屢々利を失ふ

ワグラムの會戰

同じく七月にはワグラムの大戰となつた。

この一戰こそはオーストリアにとつては最後の決戰で、實に國家存亡の繫るところであつた。兩軍合して四十萬、大砲六百門を以て戰ふこと十二時間に及んだ敵も決死の戰であつたから、猛烈に佛軍を攻擊した。フランス方もその勢に屢々破られそうになつたが、それと見たナポレオンは自ら唯一騎戰線に馬首を進めて全軍を叱咤した。敵の彈丸は幾度となく彼の左右前後に雨と飛んで來た。けれども彼は、これをば物ともしなかつた。獅子のやうになつて全軍を勵ました。

この勇敢なナポレオンの行動に佛軍は俄然勢づき、隊は敵の中軍を襲擊し

オーストリア軍粉粹さる

他は敵の背面を突き、激しく前後より挾撃したので、遂がに頑強な敵軍も算を亂して敗れた。

チャールス大公の勇敢な主力も、こゝに粉碎され、オーストリア軍は遂に復た起つことが出來なくなつた。

オーストリアは茲に休戰を請うた。

ランヌ將軍の戰死

ナポレオンは此のワグラムの會戰で足部に負傷したが、彼は事ともしなかつた。唯彼が悲しいことに思つたのは愛將ランヌが戰死したことであつた。

ランヌ將軍は忠義に篤い勇將であつた。

ランヌはナポレオンとおなじ年齡で、生れは賤しい染物屋の息子であつたが、一兵卒から段々昇上つた人で、屢々拔群の功を樹て、擢んでられて將校に擧げられた人であるが、イタリア役の時ナポレオンに見拔かれて少將に進められたのを初めとして、其後、屢々勳功があつたために、今では元帥に任ぜられ、公爵を授けられてゐた。素より篤實、至誠な人で、その勇敢なことは他に比類がなかつた

ナポレオンの友情

からナポレオンも、亦なきものに之を信頼してゐたのである。

ランヌが此の役で奮鬪力戰、能く偉功を樹てたが、ナポレオンが馬を陣頭に進めて部下を鼓舞する毎に、かふいふのを常とした。

『我が兵士等よ。汝等の勇敢なる元帥ランヌは、汝等の如く嘗ては一兵卒なりしことを忘るゝ勿れ。』

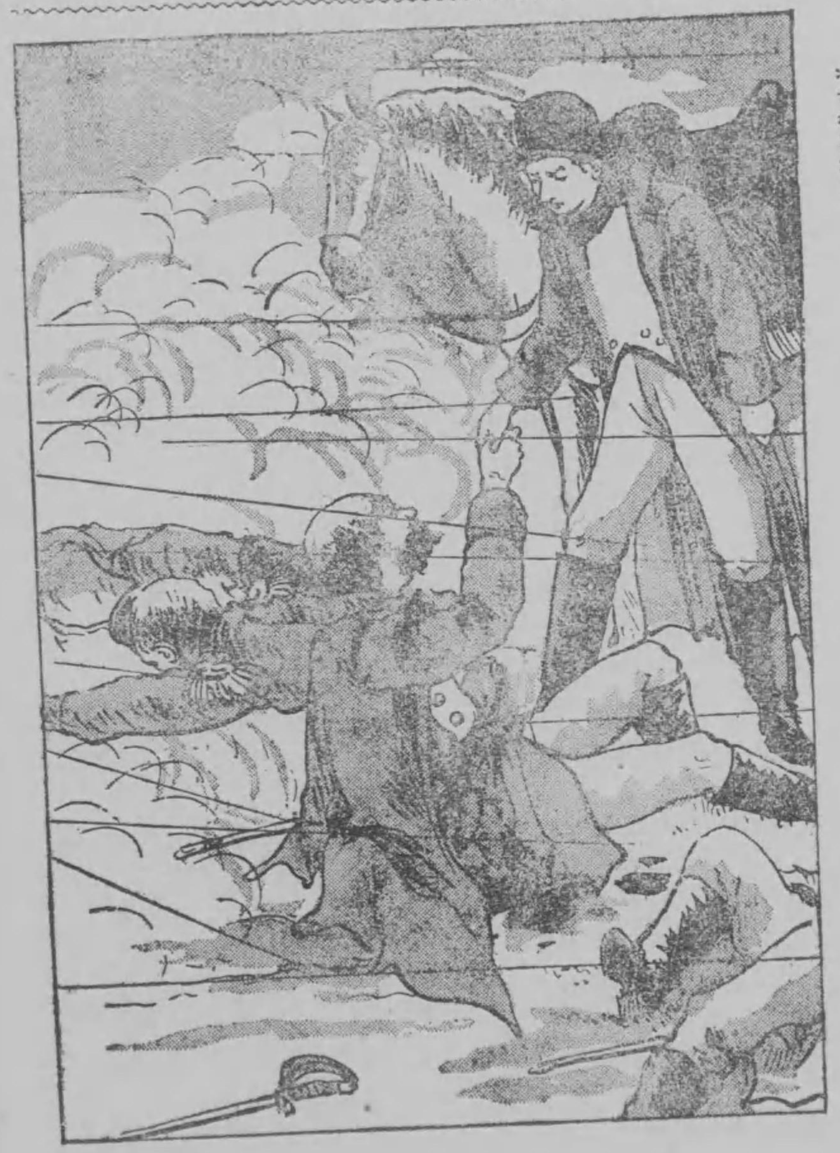
と。そのランヌ將軍が流彈に中つて重傷を負つたと聞いたとき、ナポレオンの驚きはどんなであつたらう。

彼は直ちに馳せ寄つて、朱に染まつて倒れてゐる愛將の手を握り、

『我が愛するランヌよ。決して氣を落してはいけないぞ。今我軍は御身が無ければ危い瀬戸際にゐる。決して死んで呉れるな』

といつて慰め又勵ました。

ナポレオンの慈愛餘る詞をきいて、ランヌは、面を上げ、目を見ひらいてナポレオンを凝視た。そして、



『陛下よ。わたくしは陛下の有難い御詞を戴いて、この儘死ぬるも些しも心殘りはありません。私がまだフランスと陛下との御用に立つものなら、生きても一度働きたいと存じます。けれども、私の傷は到底助からぬことは明かです、わたくしは今度の戰の結果を見ることが出來ずに、親愛なる陛下に御訣かれしなければならぬのは千載の恨事です。』

と、途切れ〳〵に答へた。

ランヌは猶ほ數日存命してゐたが、ナポレオンは味方の陣が崩れがちで、一刻の油斷もならぬ危地に在りながら、一日として身暇はない日とてなかつた。ナポレオンは衷心からランヌの恢復を祈つたが、その甲斐もなく皇帝の萬歲を祈りながら、遂に落命した。

ナポレオンは陣頭に立つて全軍を叱咤してゐる最中に之をきゝ、慕僚を押し分けて進み寄り、ランヌの死骸を抱きながら男泣きに一時間も潸然と涙を濺いだといふことである。その中に、戰線では陛下の命令を待つてゐることを聞いたので、

ウイーンの和議

彼は漸くそこを離れながら、

『フランヌのためにも朕のためにも何たる損害であらう……』

と歎いた。

威勇並びなきナポレオンにして此の情があつたことは、實に美はしいではないか。だから一兵卒と雖も、心からナポレオンに信服せぬ者は一人としてなかつのである。

オーストリア皇帝とナポレオンとはウイーンで會見し、又もやオーストリアは其の領地を割き、償金を納めて和議を約した。これ一千八百九年十月のことである。

二八、ナポレオンの全盛、「羅馬王」の誕生

ナポレオンがイスパニアから人の豫想し得ぬ速力で馬を返し、瞬く間にオーストリアに軍を進めたことを見た人々は、皆彼の神速なるに驚歎した。しかるにナ

列國ナポレオンに戰慄す

佛國の盛大絶頂に達す

ポレオンはオーストリアが大軍を以て死物狂になつて敵抗したのに對し、屢々危地に陷つたにも拘らず、よく奇計を以て敗者の位置を轉じ、終に最後の勝利を博した。これを見た歐洲の列國は、今更ながらナポレオンのやることが人間業でないことを知つて、戰慄しないものはなかつた。

だからオーストリアが一敗地にまみれてからは、機を見て起たうとしてゐたドイツの國々を初め、ナポレオンに對して反抗の念に燃えてゐた諸國は、皆一時に鳴りを靜めて了つた。今や自ら求めて彼の敵にならうと欲するものは一人としてなくなつた。

たゞイギリス一國を除いて、全歐洲中ナポレオンの命を奉ぜぬ國は、どこにも見出すことが出來なくなつた。ナポレオンの領土は遙かトルコの國境まで擴がつた。

だから、ナポレオンの絶大な權勢と武威とは其頂點に達し、フランス帝國の盛んなこと此の時のやうなことは他になかつた。

諸國の王公は爭つて巴里に朝貢し、その有様は、まるで、巴里が歐洲全體の首府のやうであつた。

ナポレオンとても、今のところ、たゞ我が皇室の地位を固め、フランス國民一般の安寧と幸福とを增進することに全力を注いだ。

夫れは、彼が、當時、人に語つた、

『朕及び朕の家族はフランス國民の幸福のためには、如何なる犧牲をも拂ふことを厭はず。』

といふ詞で明かであつた。

フランスの民は、上下共にこの宏大な帝國の光榮を謳歌して止まなかつたが、心ある國民にとつては唯一つの心配なことがあつた。夫れは何であるかといふにナポレオンは皇后ジョセフインとの間に、未だ此の大帝國を讓り傳ふべき皇儲がないといふことであつた。

この一事はフランス上下を通じて最も國民の憂慮する一問題であつた。ナポレ

皇儲＝儲けの君（天子のあとつぎ卽ち皇太子のこと）

糟糠の妻（まづしいなから困苦を共にした妻のことをいふ）

オンとても、絶えず此のことが心配の種となつてゐた。そこで、遂々皇后ジョセフインの離別問題がナポレオンの重立つた臣下から稱へられることになつた。

ジョセフインがナポレオンと結婚したのは十四年前、ナポレオンが未だ志を得ない中のことであつた。彼女は性溫良で、情深い人であつたから、ナポレオンも深く愛してゐたし、國民からも非常に敬愛されてゐた。そして今日大帝國の皇后となるまでには、ナポレオンと共にさま〳〵の辛酸を分けて來た所謂「糟糠の妻」であつた。

人情に篤いナポレオンであつたから、よしんば、子がないからといつて、ジョセフインを臣下の意見によつて容易く離別することは、實に忍びがたいことであつた。けれども、飜つて考へて見れば、私の人情を以てフランス國家の大事に代ふることは出來なかつた。そこでナポレオンは斷然意を決し、皇后に打明けて、

『我れ御身を愛することの深きことは御身の知るところなり。然れども、愛情の

皇后ジョセフイン離別

故を以て我がフランス大帝國の利害を後にするを得ず。』

といつた。

本來賢明なジョセフインは素よりナポレオンが胸中の苦悶を、誰よりも深く知つてゐた。であるから、ナポレオンから離婚のことを聞かされて、一旦は今更のやうに泣き悲しんだが、深く決するところあつて之を承諾した。

かうして千八百九年十二月十六日正式に皇后離婚のことが國民に公布せられたけれどもナポレオンは、ジョセフインの心を慰めるために前皇后の待遇を許し、マルメーゾンの離宮に住はせ、恩給や所領を豐かに與へたのである。

ナポレオンが皇后を離別したことは、一見實に不德なことのやうであるけれども、當時の時勢上から、又皇帝の位置上からいつて、實に止むを得なかつたことで、ナポレオンの心中を推し測つてやれば、却つて氣の毒と同情せねばならぬことである。

マリア、ルイザ新皇后となる

そこで、翌年の四月一日には新たにオーストリアの皇女マリア・ルイザが迎へられて皇后となつた。

皇子誕生

新皇后マリア・ルイザは翌千八百十一年、玉のような王子を生んだ。

國民が望んで止まなかつた皇男子が降誕したのであるから、ナポレオンは狂氣のやうに喜んだ。そして直ぐ侍從を呼んで

『男の子だぞ！大きな子だぞ！』

といつて嬉しがつた。あの子供好きなナポレオンが、四十二歳になつて始めて子を有つたのであるから、その喜んだ樣は想ひやられるではないか。

國民も之を聞き、聲躍上つて、目出度い〳〵を連呼しながら、皇帝萬歳を叫んだ。

ナポレオンは皇子に「羅馬王」といふ稱號を與へて、又ない者に可愛がつた。

ナポレオンはワグラムの役で、オーストリアをして一敗地に塗れしめてから、其の勢望殆ど歐洲を壓してゐた。すなはちベルギー、西部ドイツ及び北部イタリアは、直接ナポレオンの治下に屬し、南部イタリアは彼の妹の夫たるムラー將

軍の所領となつてゐた。又イスパニアには長兄ジョセフが君臨してをり、ポーランドは末の弟ルイを封じておいた。又ウエストファリアには次の弟ジエローム が王となつてをり、更にスエデンには彼の信任せる元帥ベルナドットが世嗣となつた。その他オーストリアやプロシアを始め、今やナポレオンの意のまゝにならぬはイギリスばかりであつた。

フランスの威權頂點に達す

かうして三年の間は兵を動かすこともなく、フランス帝國の威權は、實にその頂點に達した。

列國不安を抱く

そこへ羅馬王が生れたのであるから、ナポレオンの得意は實に絶頂であつた。フランス帝國の基礎が愈々こゝに固く築かれてゆくのを見た歐洲の諸國は、何れも、今や不安の念に驅られぬものはなかつた。中にもロシアとイギリスは殊に安き心地はなかつた。

そこで、ロシアは直ぐにイギリスやスエデンと密約を結び、嘗てナポレオンがイギリスを困しめるために發布した伯林條令を無視し、盛んにスエデンと共にイギリスと通商を開始した。

ロシアの戚意

ロシアは元より此の結果、いづれ砲火を以てフランスと相見ゆるに至ることを十分承知してゐた。もう此の時分から、ロシアは内密に着々戰爭の準備を整へてゐたことは明かであつた。

ナポレオンの憤懣は一方でなかつた。けれども、穩やかに事を決しようとの考で、度々彼は露帝に向つて、ベルリン條令を嚴守して、一切イギリス船を入れぬやうに警告したが、元より露帝は之れに耳を傾けようとしなかつた。

こゝに止むなくフランスとロシアとの和親は破れなければならぬやうになつた。

二九、モスコーの雪路

ナポレオンはロシアから最後の通牒を受けて、いよ〳〵ロシアに向つて出陣することになつた。

彼は一千八百十二年五月、巴里を發し、先づサクソニアの首府ドレスデンで同盟諸國の君主會議を開き、戰についての評定をなした。

一體このロシア征伐はナポレオンにとつて餘り望ましいことではなかつた。何故かといふに、彼は此の時四十三歳の働き盛りではあつたけれども、若い時代から烈しく精神や體を遣ひすぎたゝめ、一種の神經衰弱に罹つたやうな風で、何となく元氣が以前のやうでなかつた。軍略は遠がに絶妙を極めてゐたけれども、何となく自ら先に立つて活動する昔の意氣は衰へてゐた。夫れに部下の諸將もナポレオンの與へたる賞の厚きに慣れ、だん〳〵安逸を希ふやうになつてゐた。又今度の軍隊も六十萬の大軍とはいふものゝ、フランス兵は三十萬にすぎず、他はプロシアをはじめ、イタリア、ポーランド、スイス、オランダなどから驅り集めたものが多かつた。これらの軍隊が互に一致の行動をとつて、遙かな北の國に攻め入るのであつたから、何となしに、今度の戰爭に氣乘りがしなかつたのも當りまへであつた。

フランス同盟軍氣乘りせず

であるから、ナポレオンも成るべくロシアを威して、平和の裡に事を決しようと思つて、ドレスデン滯在中、ロシア皇帝に一書を送つた夫れは、

『この光輝ある君主會議に臨席し、共に〳〵圓滿なる解決を得る最後の機會を作られよ。』

といふやうな意味のものであつた。

けれども、露帝からは何等の返書も齎らされなかつた。

今日まで唯の一度も神速機敏に行動しないことのなかつたナポレオンにも似ず今度ばかりは何となく不吉な結果を豫測し、日を延してゐた彼も、いよ〳〵出征することになつた。ナポレオンは、いかなる不利な場合でも敵に戰を挑まれてそのまゝ閉口する人物ではなかつた。彼は心の裡に深く自己の好運を信じてゐた。

ナポレオンは、いよ〳〵ドレスデンを出發して大軍を北に進めた。六月の二十四日には、はやくもロシアとの國境を緩るく流れてゐるニーメン河の左岸に陣を

張つた。

ナポレオンは、こゝで大軍を三手に分ち、自らは中軍を率ゐ、アラビアの白馬を躍らせながら、ニーメンの橋を渡り、いよ〳〵敵地を蹄にかけることになつた。

ナポレオンは深くロシアの内地に侵入することが不得策であること位は萬々承知してゐたから、最初の戰で、敵の主力を粉碎しようと思つてゐた。けれども弟のジエロームやジユノー將軍が初度の戰に失策して、むざ〳〵敵を遁してしまつた。

佛軍は敵を追擊して、どん〳〵侵擊していつたが、ロシア軍は佛軍の勢に恐れてか、謀あつてか、何等抵抗するところもなく、後方に退却してゆくのであつた。

かくして佛軍は追擊を續け、七月半にはヴイテブスク、八月にはスモーレンスクまで攻め入つた。

ボロジノの戰

スモーレンスクへ來て見ると市街は一面の燒跡であつた。

そこで彼は全軍を叱咤して

『モスコーへ！モスコーへ！』

と命を下した。

ロシア皇帝アレキサンドル一世の方では、モスコーを占領されては大變といふので、フランス軍を喰ひ止めようと新たにクツトフ將軍を總大將として、ボロヂノといふところで、佛軍を迎へ擊つことになつた。

九月七日兩軍はボロジノを中心として砲火を開いた。兩軍から幾百門の砲聲は天もために崩れ地もために裂けんかと思はれるばかり猛烈に轟き渡つた。ロシア軍は一歩も後へ退かぬ決心で頑强に防戰したが佛軍の奮擊突進に敵せず、やゝ亂れ始めた。

とう〳〵此の戰はロシア軍四萬、佛軍は三萬の死傷者を出だし、勝敗は明かに何れとも決しないまゝで露軍は又もや退却した。

露軍又もや退却

ナポレオンの軍麾は正にモスコーを指して猶も進軍した。沿道はみな露軍の焚き拂ふところとなつて憩ふに所なく、採るに食なく全軍は疲勞と饑餓とに苦しめられながら、それでもモスコーの陥落を樂しみに道を急いだ。

モスコーを見下して佛軍狂喜す

一週間ばかりの後、佛軍はモスコーに近い「救ひの丘」といふところにさしかかつた。見渡せば脚下を流るゝモスクワ河の彼方には一面に甍の波が見える。その間に四百餘寺の尖塔、堂宇が屹然と秋の朝の麗光に輝いてゐる。その中でも一際目立つて宏壯なのは有名なクレムリンの王宮であつた。

幾月といふもの荒野のなかを進んで來た全軍は思ひがけもなく此の繪のような景色を見下して、どんな感慨に打たれたであらう。之を喩へて見れば、幾月の間波風のまゝに揉まれて、いづこといふ的もなく漂ひ流れた難破船が、思ひがけもなく立派な港を見付けた時の氣持でもあつたらうか。全軍は狂喜して

『モスコーだ！モスコーだ！』

と絶叫した。

全軍モスコーに入る

空屋同然のモスコー

ナポレオンとても、今こそ露帝は平和を求むるに違ひない。よし思ふまゝ城下の盟をさせてやらう。ロシアも今はもう我が意のまゝになる……。と喜んだ。

そこで佛軍は俄かに元氣づき、戰の用意をさ〳〵怠りなくモスコーの市街に近づいて見ると露軍の影だに見えぬ。城壁の銃眼にも大砲の備へがない。佛軍も一度は怪しみもしたが、畢竟敵は我軍の威勢に怖れ、この舊都を放棄して退却したものと思ひ定めた。そこで進軍の喇叭も勇ましく歩武堂々モスコーの街へ入つていつた。すると驚くべしロシアの軍隊ばかりか町も家もみな空屋になつて、全都は靜まりかへつたまゝ更に住民の影をとゞめぬさまであつた。佛軍が勇ましく行進するのを眺める人もなかつた。佛軍は、さながら物語で讀んだ死の都へでも迷ひ來たやうな氣味惡い感じに襲はれた。

軍需品や量食なども大方は何れへか持ち去られてあつた。

それはとにかく、佛軍はモスコーへ着いたといふので、氣が俄にゆるんで、懸軍萬里の勞に、みな綿の如く疲れてゐた。これまで幾十日の間、星の下や樹の陰

を宿とした彼等は、久方振りで屋根の下に溫かい夢を結ぶことが出來た。

これは九月十六日のことであつた。

その夜半ナポレオンは何方よりともなく

『火事よ！　火事よ！』

の叫び聲に、驚いて窓外を眺めやれば、驚くべしモスコーの市街に猛火炎々と立ち上つてゐるのを見た。彼は直ぐに命令を下して消火に努めさせた。然るに露軍は豫め市内の消火栓を斷ち、消火の道具をさへ何れへか持ち去つてあつたから兵士は必死になつて消防に努めたけれども凡て無駄であつた。それに烈風さへ加はつて見る〳〵全市は一面の火の海に變つて了つた。

モスコー一面火の海となる

かうしてモスコーの歴史ある堂塔伽藍も何も多くは烏有に歸し、住家の五分の四は灰燼と化し二十日に至つて漸く火は消えた。

こゝに至つて折角樂しみにしたモスコーは全く灰燼の巷となり、將士は夜寒を凌ぐ宿舍さへ失ひ、食ふに糧乏しく、徒らに士氣が衰へてゆくばかりであつた。

この不慮の災のために、さすが物に動せぬナポレチンも當惑して了つた。その中に、はやくも北國の空には寒さが增してくる。ナポレオンも愚圖〳〵してをられないことを知つた。

彼は先づロシア皇帝に向つて和議を謀るの書を贈つた。けれどもアレキサンドル一世はナポレオンに對して一片の返書をも與へなかつた。

そこで、いよ〳〵ナポレオンは重立つた諸將軍を會して今後の執るべき處置について熟議を凝らした。

その結果ナポレオンは遂に一千八百十二年の十月十九日、意を決して、モスコー退却を斷行した。

本國を出るときは兵數六十萬の大軍であつたのがモスコーへ到着するまでにはすでに十五萬餘に減じてしまひ、今また此所を引上げるに臨んで僅かに十萬を餘すばかりであつた。軍馬十萬も或は途に斃れ、或は屠られ今は五萬頭のみとなつた。

いよ〳〵怨多いモスコーの燒野原を後にして、悄然と引返すナポレオンの心中はどんなであつたらうか。

途々全軍は足を急いだが、この時はやくも寒國のことゝて十月であるのに雪がやつて來た。兵も馬も防寒の用意は整つてゐなかつた。憩はんと欲しても例によつて宿る家とてもない。給與の糧食も十分ではなかつた。ロシア軍も急に猛烈な追擊はしなかつたけれども、屢々勇敢なコザック兵が强襲して來て退路を絶つ有樣であつたから、時々方向を變へて進んだゝめ、心ばかりは行手を急いだけれども、足は進捗らず、日數ばかりが重なつた。十一月の六日、まだ志すスモーレンスクへも着かぬうちに急に氣候の劇變が來て、降りつもる雪、身を切る風、かて〻加へて宿るに家なく、食ふに糧なく日夜、病人や死者、落伍者が殖えていつた。

かうして飢ふつ、凍えつ又戰ひつ、見渡す限り白雪皚々〳〵の大平原を彷徨ひながら、絶望と死の恐怖といふ重荷を負つて、とぼ〳〵と行く佛軍の哀れさよ。劍を

スモーレンスクに迫りつゝ

悲惨のこと相次ぐ

執つては獅子のやうなナポレオンの勢威も、人力の及ばぬ自然と運命との力には遂に抵抗することが出來なかつた。

十一月十四日には、漸つとスモーレンスクまで辿り着いた。殘兵は僅かに四萬にすぎなかつた。

これから先きの佛軍には益々悲惨の狀が加はつた。

終日終夜、過度の苦痛と心勞との餘り發狂するものもある。又見渡す限り一面の雪野を照らす日光の烈しい反射に明を失ふものもある。焚くものがないために雪の裡に夜營して夜が明け放れて見ると、一團の兵卒が相抱いたまゝ長い眠りについてゐることもあつた。

かうしてナポレオンの一行は雪と飢と露軍の奇襲とに惱まされながら、退却を續けた。

昔から悲惨な戰も隨分あるが、凡そこれほどの悲劇は多くあるまい。

ナポレオンは、この時自ら先頭の軍を指揮してゐたが、後部の軍と餘りかけ隔

偶合（敗軍の將でも……）

たつたのでクラスノイといふところに止まつて、後軍の來着を待つてゐた。するといつの間にか敵軍は横合から六萬ばかりの兵を以て攻め寄せた。ナポレオンの率ゆる先陣の兵數は僅かに六千にすぎなかつた。彼が僅か十分の一の兵を以て敵軍を迎へ堂々と之を打ち破つたのは、たとへ敗軍の將とはいへ、さすがにナポレオンであつた。この戰は彼が一生の中でも最も勇ましい働きだと傳へられてゐる。この戰に敵軍の彈丸が烈風を突き、氷雪を碎いて飛び來る中を、彼は自若として令を下してゐた。一將校が皇帝の身を氣遣ふと、

『莫迦な！彈丸はこの二十年が間、つねに朕のまわりに唸つてゐたじやないか。』

とナポレオンは笑ふのみであつた。

いよ〳〵國境も間近いといふので全軍は勇み立ちプレシナまで來て見ると橋は敵のため破壞されてあつた。ここの河を渡るには先づ敵火を冒して橋を架けねばならぬ。然るに前にも後にも敵は迫つてゐる。さすがのナポレオンも心中絶望して了つた。けれども、軍隊は、こんな窮地に陥つても、なほナポレオンを信任し

て皇帝は常勝の軍神である。必ず奇計を以て敵を破るに違ひないと信じてゐた。

『部下は、それほどまでに朕を信じて呉れるのか。さらば宜し。』

ナポレオンは深く決心して立つた。そして重要の書類を焼き棄て、軍旗を分捕られぬように焚いて了つた。彼は素より死を決したのである。

ナポレオン敵を欺く

十一月二十日對岸の敵火を冒しながら俄かに架橋工事が始まつた。流れ寄る氷を押し退けながら、決死の兵士は河中に入つて工事にとりかゝつた。敵の銃火に倒れるもの、溺死するもの、凍死するものが續々と相次いだ。

その内にナポレオンは計略を以て敵を欺き、味方が他の方面から河越するように見せかけたので、敵は周章てゝ軍を引去つた。それつ！この隙にといふので架橋は急造せられ、全軍は狂氣のようになつて一時に、どつと押し寄せた。

橋上の悲劇

見る〳〵橋の上では思ひもかけぬ悲劇が演じ出された。將卒は我れ先きにと爭つて渡る騒ぎに、混亂狂躁のあまり河中に陷つて溺死するもの、砲車に轢き潰されるもの、人馬に蹂み躙られるものが無數であつた。

阿鼻叫喚の聲は兩岸に響と響き、その物凄さはなかつた、

つひに俄普請の橋は重さに耐へかねて墜落した。無數の兵士は悲鳴をあげながら折重なつて河中に溺死した。

そのうちに敵は漸く肉迫し來て、砲彈を雨のやうに注いだ。橋が落ちたので數千の將卒は退路を絶たれて全滅した。

この悲劇に少くも一萬二千の兵卒はムザ〳〵と失はれた。

殘兵今は僅かに二萬餘となつた。彼等は猶ほも困しい行軍の道をヴイルナの方向へととつた。

ナポレオン橇に乘じて歸路を急ぐ

殘軍辛うじてスモルゴニーといふところまで來た時に、本國から傳騎がやつてきて、巴里に變事が起りさうだといふ報告を齎した。

そこでナポレオンは一日も速く巴里に還らなければならぬといふので全軍をムラー將軍に託し、僅か數人の從者を隨へ、橇に乘つて晝夜兼行巴里へと急いだ。

途中も幾多の危難を冒しながら辛つと巴里に入り、チユレリー宮殿に還つたのは

十二月十八日の眞夜中であつた。

ナポレオンが去つたことが知れると殘軍は一層意氣が沮喪した。ムラーが力を盡して士氣を鼓舞したけれども、その甲斐は見えなかつた。

ムラーは翌年一月指揮を先の皇后の子ユージンに委せて歸國した。ユージンは堅忍忠義の士であつたから勇敢にもドレスデンを中心として戰線を張り、ナポレオンが援軍を率ゐて來るのを待つてゐた。

三〇、諸國民の戰巴里の落城

スモーレンスクから佛軍が五十餘萬の大兵を失つたといふ飛報が屆いたときの佛國民上下の驚駭は、まことに譬へやうもなかつた、

ナポレオンは巴里へ還ると直ぐに大臣高官を招集して、遠征の苦難、さては各將卒の武勇を物語り、

『今度の遠征軍が思ひ設けぬ失敗に終つたのは實に糧食の缺乏と寒氣の酷烈とのためである。決して劒を以て露軍に破られたのではない。しかし我が愛する五十萬の生靈をムザ〳〵失つた罪は獨り朕に存する。朕は此の點について如何なる非難をも甘んじて受ける。』

ナポレオン遠征失敗を謝す

と。かうして彼は遠征失敗の罪を國民に深く謝した。

この時フランス國の形勢といふものは實に危急を告げてゐたのである。ナポレオンが深くロシア內地に遠征し大軍を失つて空しく還つたことが歐洲列國に知れ渡ると、列國は今更のやうに動搖しはじめた。

列國動搖す

第一プロシヤを始め、ドイツの諸邦は數年來忍び來つた屈辱を酬ゆるの時機が來たといふので、各地方が一時に群がり起つた。

續いてオーストリア、スエデン、ロシア、イギリスなどの第五回歐洲諸國の大同盟が結ばれることになつた。

歐洲諸國の大同盟

今やフランスは四面楚歌の聲に包まれた。いはゆる文明國と稱する歐洲の列國は、みな矛尖を揃へて、ナポレオンといふ唯一人、フランスといふ唯一國を滅さ

んとしてゐるのである。

フランス國民はロシア遠征の失敗以來ナポレオンを信頼するの念は薄らいでゐたけれども、今列國の大同盟を聞いては、やはり頼みにするのはナポレオン唯一人であつた。

ナポレオンは僅かに身を以て巴里に逃れ還つて以來、直ちに軍隊の編成にその心血を注いだ。彼は國民の愛國心を喚起し、その堅忍不拔にして鐵やうな強い意志を以て、遂々新たに三十萬の大軍を編成することが出來た。

ナポレオン軍備に心血を注ぐ

けれどもロシア遠征で失つた軍備の缺陷は容易に恢復出來なかつた。これらの不完全を以て、數年來十分なる鍛錬を經十分なる準備を整へてゐる敵國に當るといふのであるから、すでにそこに大きな佛軍の弱點が潜んでゐたのである。

佛軍の一大弱點

一千八百十三年三月プロシヤは遂にフランスに向つて開戰を宣言した。ロシアも同時にプロシア軍に來り合した。

プロシヤ、ロシアの宣戰

ナポレオンも躊躇せず、親ら十三萬の兵を率いてドイツに進擊した。これ同年四月のことである。

ナポレオンの進擊

ナポレオンにして見れば、此の一戰こそは自分の内外に對する威望の極まるところ、又フランス存亡の決する大事な戰であつた。彼はあらゆる軍略をめぐらして到るところに同盟軍を破つた。同盟軍も死力を盡して戰つたが、ナポレオンの破竹の勢には當ることが出來なかつた。

ナポレオン連戰して連勝す

ナポレオンは、かうして連戰連勝五月にはリウッエンを陷れ、バウッエンを降して大捷を博したけれども、騎兵のない悲しさ、逃ぐる敵を飽くまで追擊することが出來なかつた。もし騎兵があつたなら敵を全滅することは、さして難かしくもなかつたのに……。

こゝにオーストリアは先年來再三フランスに敗戰してゐたが、近世外交史中でも大外交家といはれてゐるメッテルニッヒが宰相となつてから鋭意國力の恢復を計り人民の愛國心を刺戟し、軍隊の精練に努力した。そして始めはナポレオンの勢威に怖れて、表面フランスに隨つていたが、ナポレオンがロシア遠征の失敗以

オーストリアの政策

メッテルニッヒ

メッテルニッヒの權謀術策

「縱令んば全世界を敵にしても」

來その軍隊が昔の精鋭なナポレオン軍でないことを見て、密に乘ずる機會を待つてゐた。そしてイギリスやロシア、プロシアと條約を結んでゐた。

かうしてメッテルニッヒは內實同盟軍に加擔してフランスの盛り返した精力を挫がうとしながら、表面は歐洲平和を口實にして巧みに兩軍の調訂を試み、親切らしく媾和の勞を取る風を見せた。

フランスの主だつた人々も遙がにメッテルニッヒの老獪な權謀術策を見破ることが出來ず、何れもナポレオンに媾和するやうと熱心に勸めた。けれども彼は疾くにメッテルニッヒの胸中を見透かしてゐるから、斷じて同意しなかつた。

そこで、今度はメッテルニッヒも手を換へ、ナポレオンにとつて都合の惡い仲裁條件を持ち出して彼を威しにかゝつた。この條件は實にナポレオンを戰敗國として取扱つた屈辱極まるものであつた。ナポレオンは此の通知を見て忽ち憤怒した。

『縱令んば全世界を敵とするも、朕は斷じて屈辱的媾和に盲從することは出來ない。』

オーストリアの宣戰

と、これがナポレオンの返答であつた。

こゝにメッテルニッヒも愈々本音を吹かなければならなかつた。

オーストリアは遂にフランスに向つて宣戰を布告した。

そこで同盟軍のプロシヤ、ロシヤの兩軍は新たにオーストリア軍と合し、總勢五十萬を三手に別けてフランス軍を攻めた。

ドレスデンの奪取戰

ナポレオンは兵數からいつても、戰鬪力からいつても遙かに劣つてゐる軍勢を以て同盟軍に當らなければならなかつた。しかも、敵は、すでにナポレオンの巧妙な戰術を學んでゐる。ナポレオンの部下の將軍が彼を裏切つて敵に降り、軍の機密をも洩してゐる。ナポレオンは內憂外患に、その心は麻のやうに亂れてゐた。

ナポレオンは直ちに進んで同盟軍をドレスデンに破り、退却する敵軍を追擊した。ところがナポレオンの策戰を知つてゐる敵軍は豫ての計略通り、彼の裏を搔

ナポレオンの冒險

いてナポレオンの留守になつてゐるドレスデンをば、その主力を集めて攻めかけた。フランス軍も決死の勢で之を禦いだが、衆寡敵せず、今にも全滅のありさまになつた。ナポンオンは此の情報に接するや、百二十哩の道を四日で驅けてきた。そしてオーストリア軍のために馬から落ちて這ひ歩くほどの危險を冒し、遂にドレスデンに入つた。

ナポレオレは雲霞のやうに押し寄せた同盟軍を敵手にして無二無三に突擊を試みたから、守備軍も勇を鼓して敵軍に吶喊したために、敵は遂にその圍を解いて潰亂した。

この戰は終始大雨が降り、ナポレオンに前後五日の間、馬に乘つたまゝ濡鼠のやうになつて戰つたゝめ、いとゞ健康を害してゐた彼は、疲勞と發熱のため、この戰勝も充分の功果を收めることが出來なかつた。もし此の場合飽くまで敵を追擊したなら、ロシア皇帝やプロシア王を捕虜にすることも難くはなかつたらうに。

悲しいかな、ナポレオン最後の勝利

諸國民の戰

悲しいかな、此のドレスデンの戰はナポレオン一生涯中の最後の勝利であつた。軍神マルスも、もうナポレオンを見放したのであろうか。無殘や、勇氣智略人に絶し、兵を用ふること神のやうであつたナポレオンも、最早運命の極まるところとなりゆくのであつた。

ドレスデンの戰は見事なナポレオンの苦鬪に勝利を獲たけれども、他の方面に於ける佛軍の部將は、殆どみな作戰を誤まつて失敗に陷つた。

勢づいた同盟軍は四方からフランス軍を壓迫し、つひに十月十六日から四日間に亙つてライプチッヒの戰となつた。

この戰に參加した兵は、歐洲の殆ど全部の邦を網羅してゐたから、歷史上で之を「諸國民の戰」といつてゐる。

兩軍合して五十萬の兵はライプチッヒを挾んで相距る一里の間に對陣した。同盟軍は三十餘萬の大軍を以て三方から佛軍の陣地を攻擊した。戰は大雨、濃霧の裡に開始せられた。ナポレオンが腦漿を絞つた策戰は圖に當つた、同盟軍

三君主危く佛軍の捕虜とならんとす

は佛軍の突擊に、其の觸るゝ何物も粉碎し去られる有樣であつた。佛軍の騎兵隊は必死を期して敵の本營に驀進した。大地はために震ひ動き、幾千の敵は、忽ちのうちに其馬蹄に踏み躙られた。

この決死隊は、今や敵の本陣に近づきプロシヤ、ロシア、オーストリアの三君主の屯してゐる前面數百步のところまで進んだ。危機！數分間のうちに三君主が捕虜となるかと見る間に、三君主は驚いて馬に跨つて遁走した。決死隊の無念はどんなであつたらう。その中にロシアの大部隊が側面から現はれて猛烈な砲擊を加へた、決死隊は悠々と引上げた。

こんな風で始めの中は常に佛軍の勝利であつた。

二三日の間、こうして驚天動地の決勝戰が續いて、フランス軍は常に同盟軍を壓迫してゐたけれども、同盟軍は後から〳〵と新手の兵が繰り出さるゝに反し、佛軍は段々兵力が乏しくなつていつた。

ナポレオンは、持病が重くなつてゐたけれども、面にも出さず、苦しい裡に全軍を激勵した。けれども佛軍の運命は、日に〳〵惡い方に傾いてゆくばかりであつた。

サクソニア軍叛く

その中に味方の中にも脫走者が出てくる。敵に裏切るものが現はれてくる。殊にナポレオンの嘆いたのは、今まで有力な味方であつたサクソニア軍が愛國心に驅られ、國王を棄てゝ敵軍に降つたことであつた。

愈々佛軍が退却すると定まつた時に、サクソニアの國王と、その皇后とは、自國の軍隊に見棄てられて了ふたにも拘らず、ナポレオンに對する信義を固く守つて、どこまでもナポレオンと運命を一緒にすると告げた。ナポレオンは之を聞いてサクソニア國王及び皇后の義理に篤いのに感じた、心から之を感謝した、けれども彼は非常に之を氣の毒に思つて、

『御身等が、悲運なる朕と行動を共にせんとする其信義、好意は朕の永く忘れざる記念として、之を享くべし。されど、御身等は、未だ多くの軍隊あり。宜しくこゝに踏み止まりて、永く母國を完うせんことを期せよ。』

ナポレオン佛國境に退却

と諭し勸め、まだ幾らか味方に殘つてゐたサクソニア兵を解散させてやつたといふことが傳へられてゐる。サクソニア王夫妻の信義と共にナポレオンの人情も美はしいことではないか。

四日間に亙る激戰に、フランス軍は刀折れ矢盡きて、止むをえず退却しなければならなくなつた。

同盟軍に投ずるもの日に〳〵多く、その軍勢は何時の間にか百萬の大軍となり旗鼓堂々として雲霞のやうに、四方からフランスに攻入ることになつた。

ナポレオンの方は漸く募集した年少の兵も、今は殘り少なくなつて、佛國の四境を守備するにさへ足りなくなつた。

昨日までは歐洲全土を睥睨して、ひそかに覇者を以て任じてゐたフランス國も、今は危急存亡の瀬戸際が旦夕に迫つてきた。

フランス人民は今更の樣に驚き怖れたが、元より上を下への騒擾を極めてゐるばかりで、ナポレオンなしには何等施す策を知らなかつた。たゞ周章て惑ふのみで

あつた。

千八百十四年一月、同盟軍は諸城塞の奪取を避けて、たゞ一擧に巴里を拔く方が得策と考へ、百萬の軍勢は驀地に巴里に向つて押し寄せて來た。

ナポレオンは之を聞いて、何ぞ安閑としてゐられよう。胸中深く決するところあるものゝやうに、國政一切のことを皇后以下の主立つた人々に託し、自ら巴里を出でて敵を迎へ擊つことに決した。

同じ年の一月二十三日、ナポレオンはチユイレリーの宮殿で最後の告別式を行つた。集まる者は宮中の大官連や、護國の首途に向ふ軍人などであつた。彼は皇后と共に出御した。その時彼は三歳になる羅馬王を兩手に抱いてゐた。

やがてナポレオンは、その深い決心を悲愴な面持を表はしながら一同に告げた。

『朕は、これより又軍勢を率ゐて出征する。神の加護と我が愛する將卒との援けによつて敵を國境外に擊ち退けることが出來れば此上の仕合せはない。諸臣は、國家と朕とのために、義務と忠節とを忘れて呉れるな。そして萬一の時には、

フランス國に次いで朕の最も愛する皇后と羅馬王とを保護して與れ。』

と。

列につらなつてゐる者は、皇帝の此沈痛な詞を聽き、顏を蔽うて泣かない者はなかつた。

ナポレオンは越えて二十五日の朝まだき、皇后と羅馬王に訣れを告げて出征の首途に向つたが。これこそ後になつて思ひ合すれば、ナポレオン最後の訣別であつた。

佛國軍は直ちに巴里を發して同盟軍に向ひ、先づ極力ロシア軍を襲ふた。その猛々しい攻擊に恐れて、露軍はブラッセルへ退却した。ナポレオンは尙も之を追擊して連勝を獲たが、轉戰して今度はプロシヤ軍に當つた。しかし、敵は味方に幾十倍してゐる。フランス軍は次第〳〵に打ち退けられる外はなかつた。ナポレオンは少年時代の懷かしい記憶に殘つてゐる、あのブリエンヌでも死力を出してプロシア軍と會戰したが、一度は敵將を生擒るまでに優勢であつたが、如何せん、

味方は不利また不利

味方は小勢なのに、敵は大勢で、而も、見る〳〵新手の兵が加はつて、おひ〳〵國內に侵入して來た。そのうちに敵の別軍は他の方面からフランス國內に侵入して一直線に巴里を指して進む。

『敵が巴里に入つたら帝國は亡びるぞ！』

と、ナポレオンは、なをも衆を勵まし、勇氣を鼓して敵を禦いだが、時運の末は仕方のないもの、何事も不利に續くに不利であつた。

敵の別働隊は、つひに巴里の郊外に近づいた。

巴里に在つた僅かの守備隊や城外の農民は、皇帝のために身命を賭して戰つたが、素より銃砲彈藥に乏しく、彼等の奮鬪も最早致方なかつた。けれども、死力を盡して危いところを持ちこたへてゐた。

ナポレオンは巴里を救ふために、この時すでに巴里へ十哩のところまで軍を返して來た。

然るに何事ぞ、巴里に留まつてる主立つた大官や宮中の人々は到底も勝算がな

巴里陥落

頤使＝あごにてさしづする

いと思ひ、戰つて負けるよりは、寧ろ自己の安全を計つた方が得であると一決した、そこで先づ皇后に勸めて、羅馬王と共に難を避けさせた。そして三月三十日のこと僭越にも安々と巴里を開城して了つた。此時晩く彼時早く、ナポレオンが鞭も碎けよと驀地に巴里を目指して驅けてゐる途中であつた。

『陛下よ。陛下よ。最早時が後れました。巴里は都では御座いません。巴里は開城しました。』

この詞が馬を早めて急ぐナポレオンの耳朶を掠めて鋭く響いた時、大ナポレオンの心中はどんなであつたらう。……

あゝ一時は歐洲全土を席卷した自分、歐洲の諸君主を意のまゝに頤使した自分粒々築き上げたフランス大帝國も、今ははや自分のものではなくなつたのか。あの懷かしい巴里さへも自分を離れて了つたのか。そしてあの何物にも換へがたい唯一人の羅馬王はどうしたらう。無事か。怪我はないか知らん……

彼の胸は千々に碎けた。そして暫しは茫然と立ちすくんでゐるばかりであつた。

やがて我れに返つたナポレオンは、地圖と作戰計畫を書いた書類とを破り棄て口を固く閉ぢて一言も發しなかつた。

その時は劍の鞘を折れよと計り强く握つて、遙かに巴里の彼方を睥睨んだ。

見よ。敵の篝火は都の空を焦してゐるではないか……

三一、エルバ皇帝

一千八百十四年三月三十一日、同盟軍は巴里城内に侵入した。ロシア皇帝とプロシア王とは轡を駢べて入城すると、王黨の殘類は自由を與ふるもの來れりと、狂氣のやうになつて同盟軍を讃美した。そして口々に、

『壓制者を仆せ。ルイ十八世萬歲！』

と唱へてブルボン家の白百合の徽章を撒き散らした。

あゝ今や舊王家の白百合の旗は、再び翩翻と、チユイレリー宮の上に飜るやうになつた。誤まられたる光榮を以て、また舊制度はフランスに復活した。あの

白百合の旗飜へる

フランスが幾十萬の尊い犧牲を拂つて購ひ得た自由平等の新主義を一朝に棄てゝ……。

外には同盟軍が、その脚下にフランスを蹂躙してゐる。內には力と賴んだ國民が自分を仆さうとしてゐる。今はナポレオンが如何に胸中に焦つても、意の如くならなかつた。もはや巴里にさへ入れなくなつた。そこで、流石の英雄もフォンデンブローの離宮の薄暗い密室に閉ぢ籠つて、寢臺に身を橫たへながら呻吟するばかりであつた。

ナポレオン呻吟

つひに四月三日元老院はナポレオンに對し帝位を退けと迫つた。

元老院退位を迫る

四面楚歌の聲に包まれながら、フォンテンブローに越し方行末を夢のやうに思ひめぐらしてゐるナポレオンの身邊にも、依然彼に忠誠を寄せてゐる些かの殘兵があつた。彼等は、も一度地に嚙りついても、ナポレオンを擁し立てゝ巴里を突かうと決心した。ナポレオンにしても、此のまゝ帝冠を奪はれるのは眞に忍びがたいことであつた。けれども大臣將帥は、ナポレオンの舊恩も忘れて暴慢不遜な態

ナポレオン退位を決す

度を示し、無理強ひに退位を迫つたのである。

こゝにナポレオンも時勢の止むべからざるを知つた。心機一轉した彼は其雄偉な胸中の大抱負を擲つた。鉛筆を握つて立つたナポレオンは次の承認書を認めた、

『今や同盟諸國が、朕の位に在るの故を以て歐洲大陸の治安に妨げありとせば、朕はその意を體し、朕及び朕の子孫をして永く佛國の帝位を避けしむべし。苟くも佛國を利するあらば、假令我が生命と雖惜むに足らざることを記せよ。』

この悲愴な文を讀むもの、ナポレオンの心中を措し測れば、一掬の涙なきを得ないではないか。實に彼は自身のためには何ものも要求しなかつたのである。たゞ念ずるところは佛國の幸福ばかりであつた。

四月十一日いよ〳〵ナポレオンは廢帝を宣言せられ、ルイ十八世がフランスの王位に登ることになつた。

ナポレオンほどの人が退位を迫られたさへあるに、同盟軍及び王黨の人々は、

單に之れだけで滿足しようとはしなかつた。彼がフランスに在るのは危險だと思つたのである。

そこでナポレオンを地中海の一孤島エルバ島に流すことになつた。そして許すに皇帝の名を以てした。佛國政府からは年額二百萬フランを給與することになつた。

敗軍の將は勇を語らず、彼は唯々諾々、何事にも從はねばならなかつた。

『たゞ一言彼は言つた。

運命は決せられた。予は生きて天の時を待つべきである。過去はすべて夢であつた。』

と。

時は一千八百十四年四月二十日、巴里滿城の春を見棄てゝ、ナポレオンは遙かの孤島に向ふことゝなつた。從ふ者は四百人の護衛兵であつた。

曾ては彼に事ふること慈父のごとく、敬ふこと神のごとく幾多の戰場に死生を

ナポレオンの告別

誓つた近衛の將士は、遒がに袂別の涙を絞らずにはゐられなかつた。

ナポレオンも亦愁然として涙を呑むばかりであつたが、やがて聲を曇らしていふには、

『我が愛する將士等よ。我れ今汝等に別れを告げんとす。顧れば二十年の間、汝等は我と苦樂を共にしてフランスのために盡して呉れた。この終りの日に及んでも、汝等が忠節、武勇の模範たることは曩の日と異らない。予はフランスの利福のために、予の凡ての幸福を犧牲にする。予の只管希ふところ國家はの幸福のみ。今我れ將に發せんとす。汝等克く新王に忠誠なれ。予去るの後、予の薄命なるを悲しむ勿れ。我は靜かに退きて、曾て汝等と共に致せしところの大事業を筆にして、後世に傳ふるところあらんとす。戰士よ、我が前に軍旗を持ち來れ。予の親愛なる軍旗に與ふる接吻は永く勇者の胸に響けかし。我が勇敢なる戰友よ、幸多くあれ。さらば。』

ナポレオンは幾多の勇戰を物語る朽ち破れた軍旗を、心ゆくばかり搔い抱いて接吻した。

ナポレオンのエルバ上陸

嘗ては荒獅子と呼ばれたナポレオンの眼にも、この時ばかりは潸々として熱涙の流るゝを禁じ得なかつた。

かうして、ナポレオンを乘せた馬車は、慕ひ寄る人々を押し分けながら、エルバを指して出發したのである。

馬車の後影が遠く消ゆるまで見送りながら、人々は茫然と立ちつくしてゐた。

ナポレオンが一萬三千の島民に歡び迎へられて、エルバに上陸したのは五月四日であつた。

エルバ島はナポレオン誕生の地コルシカ島と、伊太利との間に横はつてゐる地中海の一孤島である。周圍僅かに九十平方哩、嘗てはナポレオンの命令一下、意のまゝに動いた歐洲全土から見れば、眞に豆粒のやうな小天地である。こゝに名ばかりは嚴めしい皇帝として、ナポレオンのエルバ島生活が始まつた。

ナポレオンがエルバ島に入ると、直ぐに彼は島民のためにあらゆる利益を計つ

た。島民の歡びは譬ふべくもなかつた。

ナポレオンは日に〳〵開拓されてゆくのを見て、島人と一緒に樂しげに日を暮してゐた。今は全く世を棄てゝ、生涯この別天地に安住する人のやうに見えた。

ナポレオン風雲を待つ

一度は歐洲全土を席卷して荒れたる獅子とまで謳はれたナポレオンは、果して首を低く垂れ、尾を捲いて、その殘生を此の遠島に送らうとするのであらうか。

否々。一度風雲到つたならば、最後の猛斷を試み、この島を脱れ出て、再びフランスに旗上げしてやらうとの念は、胸底深く火のやうに燃えてゐたのである。

ルイ十八世

けれども、同盟軍や佛國新政府が絶えず彼の擧動に注目し、時には暗殺者らしい者まで來てゐることを彼は見逃さなかつた。彼はこれらの監視を免るゝための注意を忘るゝ人でなかつた。

一方ナポレオンを逐うた佛國はどんな有樣であつたかといふに、ルイ十八世はすでに佛國に君臨し、着々と王政が舊態に改められつゝあつた。

ナポレオンに依つて絶大な擴張を遂げたフランス領も、同盟諸君主との條約によつて、その全部を失ひ、今はたゞに本國のみとなつてゐた。

民心漸く新政府を疎んず

ルイ十八世の下に組織された政府の人々は、漸く本性を表はし始め、皆私利を營み、民を苦しめた民心は漸く新政府を疎じて來た。今更にナポレオンの自由平等の政治が慕はしくなつてきた。

この時に當つてナポレオン派の民政黨は、好機逸すべからずと、旺んに民心を煽動したので、人民のこれに馳せ加はるもの漸く多くなつた。

この便りが早くもエルバ島に在るナポレオンの知るところとなつた。

彼は獨り密かに莞爾と喜んだのである。

これより先、千八百十四年九月からオーストリア國の首府ウイーンには、前後七ケ月に亘る列國大會議が開かれてゐた。勿論ナポレオンを逐ひ拂つた後の戰後の處分に就いてゞあつた。

ウイーンの洲國大會議

然るに、列國は各々の利益を主張し、自國領土の擴張ばかりを主眼にして、互ひに言ひ爭つてゐたから、談判は年を越えても容易に纏らなかつた。

エルバ島を脱出す

三二、ワーテルローの大決戰百日天下

ナポレオンが、フランスの空を睨んで風雲の來るのを一日千秋の思ひで待つてゐたが果して時機が到つた。

今やフランスの人民は新政府に快からず、しかも自分を慕うて止まぬこと、並びにウイーンの列國會議が徒らに永延いてゐることを仄かに知つた彼は、いよいよ最後の運試しだとエルバ島脱出を企てることになつた。時は千八百五十五年二月二十六日のことである。彼がエルバに來てから恰度十ケ月目に當つてゐた。

ナポレオンは、豫てイギリス船の色に塗り換へておいた船に、九百人の衞兵と共に乘り、夜に乘じて密かにエルバ島を發した。

途中幾度かイギリスやフランスの軍艦に出會つた。しかしナポレオンの乘つた船が、あまり見すぼらしかつたので、敢て怪しむべきものもなかつた。ナポレオンは密かに自分の天祐を喜んだのである。

ナポレオンの宣言

海上幸に詮なく三月一日の夜、船はカンヌ港に碇を卸した。

ナポレオンは直ちに九百人の衞兵を率ゐて上陸した。そして豫て用意してあつた。宣言書を幾萬となく配附した。それにはこんな意味のことが記されてあつた。

『兵士等よ、我等は敗れたるにあらず。予は配所に在りて汝等の聲を聞けり。されば予は、あらゆる危險を意とせずして再び汝等の前に還り來れり。いざ來りて、汝等が昔の友の旗下に會せよ。』

そのほかに國民に告げた宣言書もあつた。とにかく、此の二つの宣言書を發して彼は先づ國人の應援を求めた。果して彼を沿道殆ど何等の抵抗もなく、到るところ「皇帝萬歲」の聲を以て迎へられた。ところが、グレノーブルといふところまで來ると、そこの守備隊は道を塞いで彼の前進を阻止しようとした。これを見た彼は、馬を降り單身守備隊の前に進み寄つた。隊長は劍を翳して「撃て！」と號令をかけた、その一瞬ナポレオンは、更に一歩進んで、胸を示しながら、

『汝等よ。何をするか。朕の顔に見覺えはなきか。汝等朕を擊たんと欲せば擊つことを得べし。朕は玆に在り。』

と言ひ放つた。見れば慕かしい皇帝ではないか。彼等はみな銃を棄てゝ異口同音に「皇帝萬歳！」を叫びつゝ涙ながらにナポレオンを取卷いた。

こんな有様で、進む途々、風を望んでナポレオンの麾下に驅け參ずるものは日に日に多くなつた。リオンの如きも數多の軍勢は、忽ちに彼の下に降參して了つた。

ナポレオンがカンヌ港に上陸してから六日目に、始めて、この報が巴里へ届いた。もとより電信などはない時代のことである。

フランスの新政府はじめ、列國でも、ナポレオンが監視きびしいエルバ島を脱け出して、再びフランスに來るといふことは、夢にも豫想せぬところであつた。

だから、ナポレオンが巴里を指して押し寄せて來ると知つた時には、上下の人心は恟々として擾れはじめた。

ルイ十八世パリを落つ

ナポレオン巴里還城

ルイ十八世は、すでに身の危きを知つて三月十九日巴里を落ちて了つた。

ナポレオンはその翌日つひに一滴の血をも流さずチュイレリー宮に入ることが出來た。人民の熱狂、軍隊の歡呼は、白熱度に達した。

この時、なほウイーン會議に列席中であつた同盟諸國の元首に、この報が達したときに、彼等は全く寢耳に水であつた。誰も初めは之を信ずるものがなかつたけれども、事實であることが判つたとき、彼等は今更のやうにナポレオンの怖ろしくて偉い人間であるのに肝を冷した。彼等は一日も之を放任しておく譯にゆかなかつた。ナポレオンを一日も歐洲においてはならない。速かに之を刑すべし、彼の要求する何事をも赦してはならないといふのが彼等の一致した意見であつた。

ナポレオンの胸中には再び列國と戰はうとする意があるのを知つた佛國民は、また彼を喜ばぬ風が見えて來た。しかし彼が如何に平和を欲しても、佛國民が如何に戰を避けようとしても、平和は速かに破れ、戰は起らざるを得なかつた。

ナポレオンの巴里に歸還以來、直ちに政府は新たに組織せられ、軍隊の增員を

も大いに主張したが、國民の輿論に左右されなければ忽ち民心を失ふ場合、何事もナポレオンの獨裁通りにはゆかなかつた。

この時、同盟軍は早くもフランスの國境に迫つてゐた。

ナポレオンの苦しき戰鬪準備

ナポレオンが此の際の努力、勤勉は實に人間業ではなかつた。彼は獨りで心を焦りながら、輿論に反對しつゝ戰鬪準備を急いだ。

さて同盟國の方は總勢無慮百萬に及んだが夫れ〴〵部署を定め、佛國指して進軍した。英將ウエリントンは同盟軍の總指揮官となつた。

その中、十二萬のプロシア軍はブリユッヘル將軍之を率ゐ、ウエリントン自ら九萬餘の聯合軍を以て、軍勢はすでにベルギーの野に溢れてゐた。

ナポレオンは、固より斯くあるべしと覺悟してゐたから、一日も早く同盟軍がまだ相互の聯絡をつけない中に、敵を箇々別々に粉碎しようと計畫した。そこで、敵の進擊を待たず、辛うじて纏め得た二十萬の兵を率ゐて、先づベルギーに攻入つた。これは六月十五日の夜のことであつた。この夜ウエリントンはベルギーの首府ブルッセルに在りて、大夜會を催してゐたが、忽ち轟く砲聲に歡樂の夢を破られた。ナポレオンがウエリントンの不意を襲つたのである。フランス軍は進んでシャールロアを占領し、英軍の第一聯絡線を絶つて了つた。

ウエリントン襲撃せらる

ナポレオンは更にブリユッヘルの軍を攻擊した。プロシア軍も大雷雨中の襲擊であつたから、その不意に驚き、リニイの地を棄てゝ敗走した。佛軍はこの戰捷に一段の勇氣を增し、更にプロシア軍の跡を追擊した。

然るに、一方、ウエリントンと戰つたネイ將軍は作戰を誤つたゝめに、折角ナポレオンが成功した襲擊も水の泡に歸して了つた。

ウエリントンは、ブリユッヘル軍がナポレオンに打ち負けたことを聞き、直ぐに使者を遣して、自分はワーテルローに兵を駐めて待つてゐるから、速かに來り會するようにと言つてやつた。

ナポレオンの方では、ウエリントンの率ゐる主力軍が氣掛であつたから、ブリユッヘルを自ら追擊することは中止し、その代りに部將グルーシイに命じて、ブリ

ワーテルロー

ユッヘルを攻撃させ、それから直ちにワーテルローへ來會する樣にと嚴達した。ところがグルーシイは速かに命ぜられたる行動をとらず愚圖〳〵してゐた。そして彼が追擊を開始した頃には、ブリユッヘルは、すでに間道を辿つてワーテルローに向つてゐた。

ナポレオンは、少しも之を知らなかつたから、すでに自分の計畫通り、グルーシイがブリユッヘルを喰ひ止めて、ウエリントン軍との聯絡を絕つことが出來たと思つてゐた。これがナポレオン破滅の本とは後に思ひ合はされた。

十七日の夜ナポレオンはネイの軍と合して、いよ〳〵ワーテルローに進軍した。ワーテルローといふところは、ベルギーの首府ブロッセルから南方十一哩にある一村落であるが、今日では世界古戰場の最も有名なものゝ一つに數へられ、ブラッセルから態々鐵道まで敷かれてゐる。そこの小高い丘の上には立派な記念碑が建てられて、日々遊覽の客が絕えないといふことである。

さて明くれば六月十八日の拂曉、夜來の雨はまだ降り止まず、田舍道のことゝ

戰鬪開始

兩軍の奪取戰

て泥濘脛を沒するありさまに、人馬共に惱まされた。ナポレオンは昨夜來、迅速に戰備を了へ、早旦から小高い丘に登つて敵軍の動靜を偵察してゐたが、すべて自分の計畫通りであつたから、心中密かに必勝を期してゐた。

唯一刻も待たるゝのはグルーシイ軍の到着であつた。

やがて正午近い頃になると雨は漸く霽れて來た。こゝに佛軍はじめて行動を開始し、ワーテルロー大戰の序幕は切つて落された。瞬く間に兩軍からは轟々たる砲聲が天地を轟き渡つた。硝煙は山野を立ち込めた。

ウエリントンの軍は今や全線に亘つて、ナポレオンの猛烈な攻擊を受けた。彈丸は雨のやうに落下する。見る間に死屍が累々と散亂する。すでにウエリントン軍は苦戰に陷つて了つた。ナポレオンは茲ぞと更らに味方を勵まして砲擊を加へた。

英軍はいよ〳〵危殆に瀕して今は一時も支へかねるやうになつた。

そこへ息せき切つて驅けつけたのはプロシア軍のビユーロー將軍であつた。思ひ

がけぬ援軍に、英軍は、俄かに士氣が奮ひ立ち、逆襲に移つて來た。

又もや兩軍は死力を盡し追ひつ追はれつ戰つた。かうして同じ陣地を爭ひ奪ふこと幾度、互ひに獲ては奪はれ、復失ふなど、兩軍は伯仲の間に苦戰を重ねてゐた。かれこれするうちに時刻は移つて午後四時頃に及んだ。かくしても猶ほ兩軍の勝敗は決しなかつた。

この時、ナポレオンにとつて一刻千秋の思ひで待たるゝのはグルーシイの援軍であつた。彼は絶えず望遠

鏡を放たず、小高い丘から眺めてゐたけれども、夫れらしい姿が見えなかつた。しかし此のまゝ戰を續けてゐては到底も勝利は覺束ないと思つたから、勝つか負けるか決を一擧に定めようと、すぐ敵の中軍が死守してゐた小丘を奪取せよと命じた。

ネイ將軍の率ゐる精兵は無二無三に小丘に肉迫した。この軍は固より決死の覺悟であつたから、敵軍は思ひ掛けぬ突擊の激しさに、茲を先途と防戰したけれども、危急は刻一刻迫つて今や將さに英軍は總崩れにならうとした。

兩軍の死屍や武器輜重は山のやうに散亂して積み重なつた。全く歩む道もない程であつた。ナポレオンは、最早や疑ひもなく味方が全勝だと莞爾しながら、丘の上に突立つて、猶ほも望遠鏡を手にとつて戰況を眺めてゐた。

すると遙か彼方に當つて一陣の砂煙があがるのを見た。よく見ると夫れは疾風のやうに近寄つてくる一隊の軍馬であつた。ナポレオンは躍り上つて喜んだ。

『グルーシイが來た。援軍が來た。』

と。然るに何事ぞ、ナポレオンの叫聲も終らぬうちに、此の隊から味方を目掛けて火蓋を切つて來るとは……。

これこそナポレオンが待ちに待つたグルーシイではなく實にブロシア軍を率ゐたブリユッヘル將軍だつたのである。

ブリユッヘル英軍に來援す

しかし佛軍は躊躇してゐる場合ではなかつた。

ナポレオンは眞先に立つて進んだ。けれども左右を顧れば、殘り少ない味方は今朝からの連戰に、皆疲れきつてゐた。生色のある者は一人もなかつた。殊に望を屬してゐたグルーシイの援軍は來ず、却つて敵には新手が加はつたので士氣は頓かに挫けて了つた。それでもナポレオンの激勵に、血刀を振つて敵の軍中に突擊した。中にもナポレオンが愛撫してゐた近衞軍は必死を期して戰つた。

佛軍の大敗

しかし、佛軍は新手の加はつた同盟軍に對しては最早や敵することは出來なかつた。そして、哀れにも散々に打負かされて了つた。近衞隊は一兵殘らず討死して了まつた。ナポレオンは左右を顧みていつた。

『屍を戰場に曝すは豫ての願である。今こそその時が來た。』

ナポレオンは劒を拔いて白馬に跨り、敵中に突き入らうとすると、そこへ皇弟ジエロームが駈けつけて來た。そしてナポレオンにいつた。

『兄上よ。弟も隨はん。苟くもボナパルト氏を稱するもゝ死すべき期は今なり。』

ジエローム健氣にも、ナポレオンと同じ枕に死ぬ覺悟であつた。

しかし、之れは左右の元帥によつて止められた。彼等は、

『死は易く、生は難し。一先づ此所を引上げられ、再擧を計らんには……』

と言葉を盡して諫めたのである。

このときワーテルローの日は全く暮れ果てた。從者數名を連れて、悄然と落延びてゆくナポレオンの心中は如何であつたらう。

一時は戰の神と謳はれ、歐洲全土を震慴したナポレオンの戰史は、正にかうして最後の頁を終つたのである。

人の運命

吾人は人の運命といふものを考へて、坐ろに無常を感ぜずにはをられない。若し彼の時ナポレオンの望遠鏡に映じた一陣の砂塵りが敵將ブリュッヘルの夫れではなく、彼の計畫通り味方のグルーシィが來り援けたのであつたなら、よもやナポレオンほどの英雄が、むざ〳〵この痛ましい結末で、彼の燦爛たる戰史を終らなくても濟んだであらうに。

痛恨と絶望との涙

六月二十一日の朝まだき、ナポレオンは悄然と巴里に逃れ返つた。彼の蒼ざめた頬の上には、痛恨と絶望の涙が流れてゐた。

ワーテルローの大敗を知つた市民は、元より出迎へて彼に一片の同情すら寄せようとも知なかつた。國民は上下を擧げて唯一人の彼を虐げた。

百日天下

彼は遂々再び廢帝を宣告された。

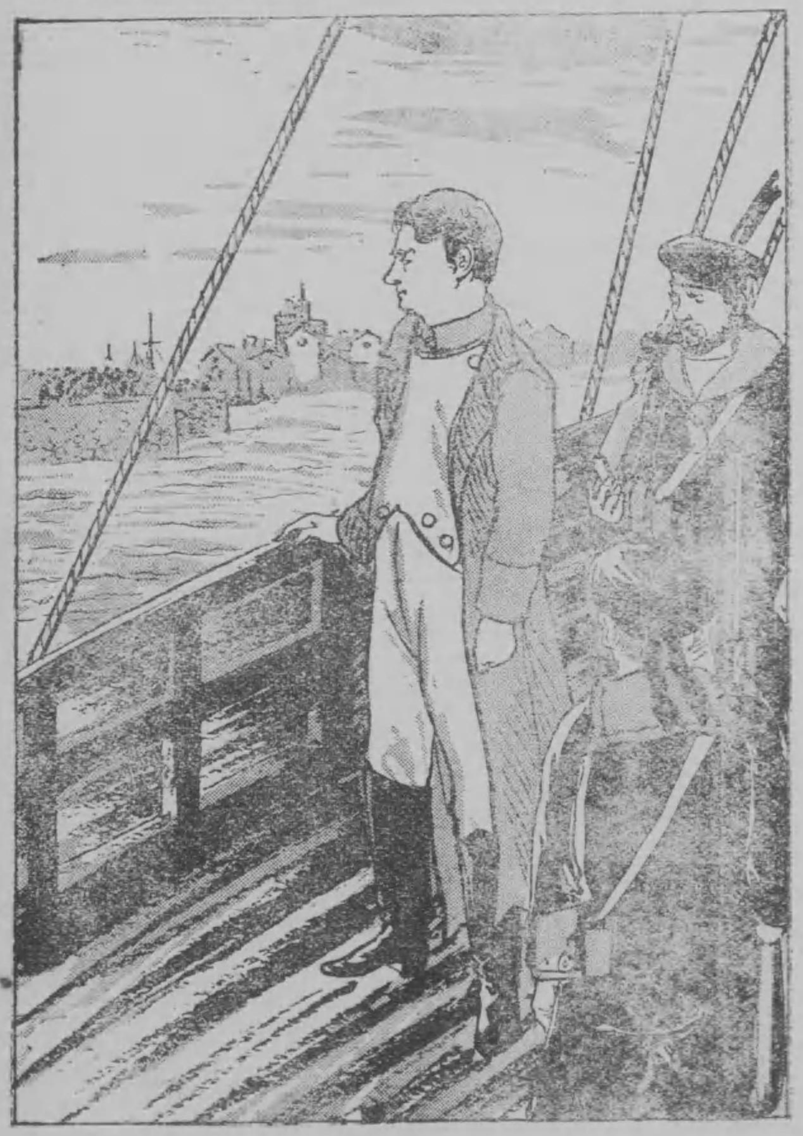
ナポレオンがエルバ島を脱れ出て巴里に入り、皇帝の位に復した三月二十日から、いまゝた廢帝を宣告された日の間が、恰度百日であつた。これをナポレオン再擧の百日天下と歴史家はいふてゐるが、その百日天下は茲に儚なく終りを告げた。

フランスのためならば世界を敵としても戰を厭はなかつたナポレオンは、フランスを敵とすることは身を切られるよりも忍びないことであつた。

よし。自分がフランスにゐれば國民の幸福が妨げられるといふなら自分は何處へでも行つてやらう。フランスのためなら、自分の命などは、さら〳〵惜しいとは思はない。これが彼の眞意であつた。

彼は國民の意響を察し、フランスを去つて遠くアメリカに渡り平和に餘命を送らうと決心した。しかし英國は之を許さなかつた。

その時、英國政府に一身を委ねることが最も得策であると勸めて止まぬ人が多かつた。そこで、ナポレオンは英艦ベレロフォン號に我が一身を託して、時の英國攝政王子——後にジョーヂ四世ともいつた——に書を寄せた。夫れにはかういふ意味のことが書いてあつた。自分の政治的生涯は終つたこと。自分は唯一個の私人として平和な餘命を送りたいこと。それには貴國法律の保護の下に、我が一身



ナポレオン永久に故國と訣別す

を委ねるのが最も好都合と思ふこと。如何となれば、自分は貴國が自分に對し最も信實、最も寛大、最も有力であることを信ずるから……。といふやうなことであつた。

英艦ベレロフォンの艦長はじめ提督ホサムは、ナポレオンを皇帝として最も鄭重にもてなした。

七月十六日早朝ベレロフォンに一身を託してナポレオンはロシユフォール港を出帆した。十餘人の從者が之れに隨つた。

甲板に立つたナポレオンは、瞬きもせず、遠ざかつてゆく祖國の岸邊を眺めてゐた。

『刻一刻に糢糊として薄れゆく祖國よ。いつの日にか、復汝に會ふことが出來よう。自分の光彩ある生涯が了つた。嘗ては英國を征服せんと期した日もあつたが、今となつては跡方もない夢であつた。自分は、今その英國に亡命してゆかなければならない。さらば祖國よ。汝の上に永久の祝福あれ。』

＊ナポレオン

彼は心の中にから叫んで、祖國に最後の訣別を告げた。

三三、セント、ヘレナの配流

七月二十四日の朝ナポレオンを乘せた英國軍艦は恙なく英國に着いた。

けれども、彼は上陸することを許されなかつた。艦の中で彼は英國政府の命を待つた。やがてイギリス内閣の決定書は彼の許に送られた。見れば何事ぞ、『歐洲平和を保持するために汝を戰時捕虜としてセント・ヘレナ島に送る。』といふのであつた。夫を聞いた時の彼の悲憤と痛哭とは譬へやうもなかつた。

武士の情を知つてるナポレオン

彼は生涯中、私のために人に怨を含んだことは一度もなかつた。國家と公益とのためには、幾萬の將卒を殺したこともあつたけれども、一個人としての彼は寛仁と慈愛とを以て、あらゆる人に對した。ワーテルローの敗戰に、あの苦戰に當つても、通りすがりに重傷に呻吟してゐる英國將校を見ては、素通りは出來なかつた。彼は厚く手當をして、その將校を救つてやつた。又戰鬪中に敵の重傷者

を見殺しにする者は嚴罰に處すと告げたこともあつた。實に彼は敵に對してさへも、武士の情といふものを忘れたことはなかつた。個人として他に惡意を以たことのない彼は、他も自分に對しては同樣であると信じてゐた。

武士の情を知らぬ敵國

然るに、英國は、戰敗の人とはいへ、フランス皇帝を遇するに捕虜を以てし、剩へ帶劍を取り上げて之を遠島へ配流することは――之れが武士の情であろうか。

自分の正直な心から、英國を餘りに信じすぎたナポレオンは、正に欺かれたのであつた。裏切られたのであつた。

今後の悲慘な餘生に絶望したナポレオンは遂に自殺を企てた。

しかし、之れは止められて遂げ得なかつた。

一千八百十五年八月八日、ノーザンバーラン號は、ベレロフォンから轉乘したナポレオンを乘せて、遙かにセント、ヘレナに向つた。

セント、ヘレナに向ふ

この軍艦に移つてからナポレオンに對する待遇は、すつかり變つた。全然捕虜

の取扱であつた。番兵は始終彼を監視した。

艦が英國を出航してから三十幾日目には、赤道直下も無事通過し、七十幾日の長い航海も何の障りなく十月十六日といふに漸くセント・ヘレナに安着した。

セント・ヘレナといふ島は渺茫たる大西洋の上に横はつてゐる一つの絶島である。歐洲大陸を距つこと遠く二千餘里、亞弗利加洲からさへも九百幾里の遙かな彼方にある孤島である。島の周圍僅かに十五六里、全島殆ど火山岩から成つてゐる殺風景な島である。であるから、荒蕪の地を彩る花卉草木も稀に、飲料水乏しく、健康を害すること甚しい瘴癘の地である。

瘴癘の地＝健康を害する毒氣のある地をいふ

今までの光輝に満ち充ちた偉大な生活に引き換へて、俄かに斷崖からでも突き落されたやうなナポレオンの涙多い流人生活は、こゝにその序幕を開くのであつた。

僅かな從者を伴侶としながら、一小舍に起伏するナポレオンの詫住居は、何といふ變り樣であらう。

幽囚中の慰安

嘗てエルバ島に流されたときは、假令んば一小島でも、そこの皇帝であつた。夫れに引き換へ、こゝのは全くの捕虜生活である。數隻の英國軍艦は島の周圍を見張りしてゐる。陸上には三千の兵士が警戒してゐる。住居の周圍には塹濠が掘られ、大砲が据えられ、人の出入も忽かせにはしなかつた。

冷酷極まる監視者は、實に囚人同樣にナポレオンを取扱つていた。供給品も生命をつないで行くに必要なものに限られ、何等この幽囚を慰安するに足る設備はなかつた。セント・ヘレナの「自然」とても、素より彼の耳目を歡ばすには足りなかつた。新聞書籍の類も、非常に嚴密な制限を經て讀むことを許された。

こんな一兵卒の捕虜にも等しい酷遇を受けながらも、彼は些かも王者の尊嚴を失はなかつた。

自分が最も好んでゐたのは讀書であつた。彼は少年時代から愛讀してゐた英雄豪傑の傳記を繙いては自ら鬱を散じ憂を消してゐた。そして或は夫れに註釋を加へたり、批評を書いたりすることを樂しみとした。

ナポレオンの昔咄

讀書に飽きた時は、戸外に出て馬に乘ることが、又なくいゝ慰めになつてゐた、しかしこれも、後には番兵を見るのが嫌さに、やめて了つた。そして木馬を造つて室内で乘馬の眞似をしたといふ。嘗ては逞しい白馬に跨つて全歐洲をその馬蹄に蹂躙した彼が……涙が出るやうではないか。

又雨の降つた日や、秋の夜長などには、從者の誰彼を集めて昔咄をするのが慰めの一つになつてゐた。しかも友達にでも語るやうな氣樂さで話すのであつた。その話の多くはコルシカの小兒時代から、皇帝としてセント・ヘレナへ流されるまでの五十年間の追憶談であつた。成功談もあれば、失敗ばなしをして、從者を笑はせることもあつた。しかし、他を恨んだり咎めたりすることは些かもなかつた。戰爭のはなしは中にも彼の好むところであつた。話が高潮して來ると寢食を忘れることも少くはなかつた。又ワーテルローの戰ばなしなどが始まると、途中で突然默り込んで了ふことがあつた。從者どもが續きを促すと、ナポレオンは如何にも悔恨に堪えぬらしい表情をして、『あゝモ一度、あの戰爭がして見たい。

セントヘレナ追懷錄

ナポレオンの思ひやり

グルーシイさへモ少し速く來て呉れたら――あんなウエリントン如きに……」と繰り返しては歎くのであつた。

ナポレオンが問はず語りに話す昔咄や戰爭談は、多く從者によつて筆記された又ナポレオン自から筆を執つて書くこともあつた。これ等の記錄は、後になつて「セント・ヘレナ追懷錄」として世に發表され、いろ〳〵の方面に有益な參考資料となつていた。

又他に對して思ひやりの深い、溫和しいナポレオンは、自分のために遙々此の離島に扈從して來て世話をやく從者を、心から氣の毒に思つてゐた。夫れで成るべく從者と共に愉快な日を送らせてやらうと心を配つた。自分の慘らしい運命を忘れて……彼は、よく從者どもと一緒になつて、木を植え花を作つたりした。又子供等を相手に將棋をしたり、驅競や目かくしをして遊んだ。

『我々は小さな集りだ。小さい一つの家庭である。この遠い岩の上に流されている恐ろしい月日を、出來るだけ樂しく暮そうではないか。』

こういつては、淋しさに堪えない從者の心を慰めるのが常であつた。

しかし、ナポレオン自身も、風が吹き荒れて岸を打つ濤の音高い晩など、眠れぬまゝに、ゆくりなく思ひ出るのは唯一人の子羅馬王のことであつた。

忘れ得ぬ羅馬王の面影

ナポレオンが最後に羅馬王を見たのは、忘れもしない千八百十四年の一月二十五日、プロシヤに出陣するとき、チユイレリー宮で一時の別れと思ひながら暇を告げたときであつた。あゝ、思ひきや、夫れが永の訣れとならうとは、あの時は四つのいたいけ盛りであつたつけ。嘸今頃は大きくなつたらうと、ナポレオンは羅馬王の畫像を眺めては泣かぬことはなかつた。

監守ローの無情

ナポレオンを監守する人は、英國のハドソン・ロー將軍であつた。この人は素より冷酷な性質の人であつたから、假令政府の命令もあつたとはいへ、ナポレオンに對しては、實に無情極まる待遇をした。ナポレオンを見張りすることの嚴しいのは元よりのこと、ナポレオンの身内から來る手紙や、それらにナポレオンから送る手紙なども、一々封を開いて認べた。ナポレオンに對する年金も段々額を減らした。

ローのナポレオンに對する取扱が餘りに過酷なのを見かねた一人の從者は、憤慨の餘り、ナポレオンのためローを銃殺して自分も潔く死なふと決心した。それはサンチニといふ人であつた。そして、好い時機あれかしと密かに狙つてゐた、このことが、どうした機でかナポレオンの耳に入つた。ナポレオンは大に驚いてサンチニを呼び、無謀なことは決してして呉れるな、汝が予を思ふの情は、よく解つてゐるといつて深く戒めてやつた。そしていふには

ナポレオンの人格光りを益す

『ローが予に過酷を行はんと欲せば之を爲せ。戸にも窓にも番兵を置きて、予に水とパンとのみを與ふとも、予は之を意に介せず。予の魂は自由なり。然り嘗て六十萬の兵を率ひたる如くに獨立なり。歐洲に法律を與へたる時の如くに自由なり。』

と。長い間の、配所の困苦がナポレオンをして、ます〳〵偉大なる光輝を增さしめて來たのである。彼の人格は、今や、軍人、政治家として偉大な上に、更に人

ナポレオンの夢

間として立派な渾然圓熟の域に近づいたのである。

かうして儚ない孤島生活に朝夕を送つてゐるナポレオンの上には。いつの間にか六年の歳月が流れた。彼が讀書や戰爭談に疲れて寢たその夜の夢に入るのは、何であつたらう。コルシカにいたときの兄弟喧嘩もあつたらう。ブリエンヌの學校時代もあつたらう。少壯士官として得意の時代もあつたであらう。戴冠式の華々しい日のことも見たであらう。さてはモスコー侵入の慘劇、ワーテルローの諦めかぬる敗戰などもあつたであらう。が、併し、殊に鮮かに見えたのは、羅馬王の可愛い姿であつた。そして、思はずも我が子を抱かうとして　岸を打つ怒濤に目覺むれば、自分は冷たい寢臺に横はつてゐるのであつた。あゝ夢であつたのかと、羅馬王の畫像を眺めながら、無量の感慨に打たれた夜半もあつた。

ナポレオンの病重る

セント・ヘレナに來てから、ナポレオンの健康は果してよくはなかつた。しかし、大したこともなく、或は病み、或は癒えて、早くも六年の歳月を經たが、千八百二十年の八月頃から、愈々本當の病人となつて了つた。そして、唯讀書丈けが漸つと出來る位で、外出や談話なども困難になつてしまひ、翌年の三四月頃には、ます〳〵病勢が進んで來た。

その時、夜になると、西の空へ彗星が現はれはじあた。ナポレオンは之を見て自分の死も間近いといふことを覺悟した。夫れは昔ローマの大英雄ケーザルが死ぬとき、矢張り彗星が現はれたといふことを思ひ浮べたのであつた。

その頃、彼を看護してゐる從者に、

『靜かに寢てゐるのは心持のいゝものだ、自分は、かうして病床に横はつてゐるのが樂しみになつた。あゝ自分も衰へたな。昔は自分にも無限の活氣が溢れてゐた。精神の眠ることはなかつた。その時の自分はナポレオンであつたが、今はなんでもなくなつた。ナポレオンは生きているのではない、唯息が通つてゐるだけのことだ。』

と言つたりした。彼は明かに病の苦痛を忍んで言つたのであつた。そして寢食を忘れて、看護する人々に、優しい詞を以て、いたはつてやつた。

千八百二十一年四月の半ば頃のある日、今日は少し氣分が快いといふので、愛兒羅馬王の肖像を前に置いて、最後の用意をなし、遺言書を認めた。それは可なり綿密に死後のことを書き記したものであつた。其中には一族親戚を始め、少年時代から此のセント・ヘレナの生活まで世話になつた人々に對して、殆んど洩らすところなく恩情を謝す詞が述べられてあつた。又此等の人々に悉く遺產を分配する方法も指圖しておいた。最後に自分はフランスを忘るゝことが出來ぬ。死後は必ず遺骨を巴里セーヌ河畔に埋めて呉れと書いてあつた。

そのうちに、ナポレオンの容體は日一日と重體に陷つてゆくばかりであつた。從者の人々は、世もあられず泣き悲しんだが、心を盡した醫藥も利目がなかつた、五月四日は最早昏睡の狀態であつた。そして囈言に『フランス――軍隊――羅馬王』といふかと思へば、又『マッセナ我軍は勝利だ！進め擊て！』などと言つたりした。

その翌日の五月四日は、未明から大風雨で、瀑のやうな豪雨、天地を覆へすやう

な烈風で、荒れ狂ふ大濤がこの孤島の岩礁にぶつかつて物凄い日であつた。ナポレオンが最も愛した手植の柳も根こぎにされて了うた。

この日の夕暮、ナポレオンは眠るが如く息を引き取つた。

あゝ英雄の死。嘗ては歐洲を意のまゝに蹂躙したナポレオンは、今粗末な冷たい死の床に、生前の偉業を知らざるものゝ如く、靜かに横はつてゐた。偉人の靈魂は五十二年の地上生活を終つて、遠く天に歸したのである。

遺骸の上にはナポレオンが最も誇としたマレンゴー役の軍服が被けられた。ナポレオンが遺言書に書いたセーヌ河畔に葬つてくれといふ望みは英國政府によつて遂に許されなかつた。そしてセント、ヘレナのうちでナポレオンが生前最も好んでゐた「ゼラニアム谷」といふところに葬られた。その谷間には、此の島で珍らしい清水が滾々と湧き出てゐて、その傍には柳の木が茂つてゐた。ナポレオンは生前よく此處へ來て清水を呑み、勞れを休めた所である。

蓋世の英雄ナポレオンが、人界を遠く離れた淋しいセント・ヘレナ島のゼラニ

遺骸巴里に移さる

アム谷に葬られて、冷たい苔の下に永久の眠りについてから、いつしか十八年の歳月がめぐり流れた。その間には、歐洲の大勢も非常に變轉した。そして不思議にもナポレオンが成した功業の遺跡が次第に光明を放つて來た。いつの間にか保守的反動が破れて、世界は自由の機運に向ふようになつた。

イギリスにもフランスにも、自由主義が勝利を得る日が來た。フランスでは七月革命といふのが起つて、ルイ・フイリップが王位に卽いた。

今までナポレオンの功業に對して毀譽さま〳〵の評を下した人々は、あの絶海の孤島に、偉人の墓を放棄しておくことが、如何にもその靈を辱かしめるものだと氣がついて來た。そこで、フランスは擧國一致、フランス王の名を以て、イギリスに對し、ナポレオンの遺骸を渡して呉れと申入れた。素より今となつては、イギリスも異議のある筈がない。

かうして、ナポレオンは死後十九年目に、望み通りセーヌ河畔の彼が愛したフランス國民の間に、安らかに眠ることが出來るやうになつた。

かくてナポレオンが大皇帝として、セント・ヘレナ島から再び故國に迎へられたときのフランス國民の狂氣は言語に絶したものであつた。その日は靈柩の還御すべき阜頭から、墓所と定められた廢兵院まで、幾十萬の民衆で埋められた。その時『皇帝萬歳！』の喊聲は天地を搖かすやうに、人々の口から迸り出た。その騷ぎはナポレオン戴冠式に優るとも劣りはしなかつた。これは一千八百四十年十二月十五日のことである。

いま巴里セーヌ河の清い流れに臨んで、嶷々と聳え立つてゐる廢兵院堂内の奥深く、壯麗な雲斑石で造られたナポレオン大皇帝の石棺が靜かに横はつてをる。その周圍には十二戰場に型どつた大理石の巨像が立てられ、ナポレオンの分捕つた諸國の軍旗六十旒が、そこにおかれてある。床は月桂の花環がモザイクで描かれ、中に八戰場の名稱が記されてある。この墓は當時有名なフランス美術家が一千八百四十三年から十年の長い歳月を費して成つた苦心の設計である。

人の値は棺を蓋うて後はじめて定まるものである。ナポレオンは、生前、その功業に對して、毀譽さま〴〵の評を受けた。否、百年を經たる今日も、なほ彼に對して非議を加へるものもある。然し、冷靜に今日から顧れば、ある意味に於て、ナポレオンとは、舊い封建主義を打破した自由な新しい近世主義の大宣傳者ではないか。右手には破邪の利劍を提げ、左手には百代に生きる法具を持して現代歐洲文明の基礎を建設した「救世主」ではないか。

彼の肉體は百年の昔に滅びて了つた。けれども、その偉靈は遂に世に勝つた。いな悠々たる「時」の流れは、彼れをして益々偉大にするであらう。

あゝ短かゝつたナポレオンが五十二年の生涯、こは、永久にフランス國の礎である。永遠にコルシカ島の誇りである。

ナポレオン 終

大正七年九月二十日印刷
大正七年九月二十五日發行

科外教育叢書 54
ナポレオン奥付

科外教育叢書刊行會編輯部編纂

右代表者並發行者 東京市神田區錦町三丁目十七番地 大葉久吉

印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 青柳十一郎

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社 秀英舍第一工場

發行所 東京市神田區錦町三丁目 振替口座東京六三八四番 科外教育叢書刊行會
大阪市西區靱下通二丁目 振替口座大阪一八四五九番 科外教育叢書刊行會支部

不許複製

科外教育叢書第一期刊行書目

第一回　少年武士功名物語　國史趣味讀本　日本の精華　博物界の現象　世界の風俗
第二回　化學工業の話　古今名文集　立志小說蜜柑箱の机　通俗理化現象　國語要說
第三回　內外教訓物語　天文と地文　現代書翰文範　ケーザル　檜木正成
第四回　作文新資料　內外名婦傳　國民年中行事　日用法律顧問　教育小說鷹雄と海老太郎
第五回　內外逸話文庫　瑞西の義民　現代女用文範　海上生活　世界發明物語
第六回　明治天皇御製謹解　アーサー王物語　格言俚諺辭典　イソップ物語　內外立志談
第七回　支那の文物　花ものがたり　內外歷史美談　漢文要說　西鄕隆盛
第八回　博物辭典　世界の三聖　日文字便覽　古今忠孝美談　日本の名勝
第九回　大石良雄　動物と人生　商業の話　十大詔勅謹解　現代記叙論說文範
第十回　先哲遺訓集　通俗物理綱要　生物奇談　內外人名辭典　家庭教訓童話
第十一回　外國の名勝　通俗生理衞生　ナポレオン　狂歌と川柳　通俗經濟講話
第十二回　古今の兵器　植物と人生　和歌と俳句　世界の奇聞　內外武勇談

385
54

10.6.25